

村治重厚  
熊谷直温校  
安藤正胤正

原病學通論  
三

ヤ 3  
1362  
3



1362  
3

原病學通論卷之四

目次

血行違常ニ起因セシ諸疾上

局發貧血

局發充血

下口ニボシ  
上ニボシ

原病學通論

卷之四目次

三友舎



91-1959



原病學通論卷之四目次畢

原病學通論卷之四目次畢



原病學通論卷之四

和蘭教師黃亞爾茂聯斯言講述

膳所 村治重厚

松江 熊谷直温 筆記

東京 安藤正胤

血行違常二起因

一 司發貧血

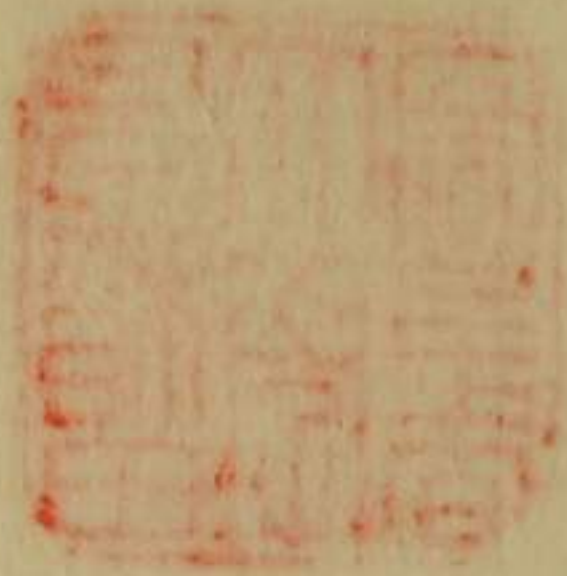
二 局發貧血 八、局處及血液其量減スルヲ謂フ其

因種々アリ之ヲ左ニ掲ク

第一 器械的源由ニシテ其無血脈管及外部血

原病學通論 卷之四 三

歴迫スルニ由ル、乃衣帶ノ歴迫ニテ、皮膚ニ貧血  
 ヲ起シ、或ハ種々ノ腫瘍局部ノ脈管ヲ歴シテ、其  
 部ニ貧血ヲ發シ、或ハ頭顱ヲ打撲シテ、其碎骨片  
 ノ腦質ヲ歴スルニ由リテ、腦ニ貧血ヲ來シ、或ハ  
 皮膚ノ癍痕、收縮ノ歴勢ニ由リテ、局部貧血スル  
 等是ナリ、又一ハ貧血ノ源由、血管内ニ存スル者  
 ニシテ、例ハ「エンボルク」トロンボスノ、血管ヲ閉鎖  
 スルニ由リテ、貧血ヲ起スカ如シ、其他動脈結紮、  
 動脈破裂等ニテ、局部ニ貧血ヲ發スルコトアリ、是  
 皆純乎タル器械的因ニ由ル者ナリ、



第二 細動脈筋層ノ痙攣ニ基因ス、是、細動脈ノ筋

層痙攣シテ、過劇ニ收縮スルヲ以テ、血管ノ口徑  
 狹小トナリ、血液ノ循環ヲ妨碍シテ、為ニ貧血ヲ  
 發スルナリ、試ニ如此キ痙攣ヲ奮起セシメ、欲セ  
 ハ、須、交感神經ヲ刺衝ス可シ、交感神經ハ、尿管群  
ニ分布シテ、其運動  
ヲ主宰ス、其神經ヲ刺衝スルニ、一ハ直ニ神經ヲ  
 刺戟シ、一ハ刺衝ヲ反射性ニ施ス者ニ在リ、其ニ  
 少異ナシ、例之ハ、皮膚ニ電氣ヲ通シ、或ハ之ヲ冷  
 凍スル片ハ、肌表、灰白色ヲ呈スルカ如シ、又止血  
劑、醋酸鉛、硫酸鹽類、  
酢酸、硫酸、  
奴、礦屬、  
酸、  
等、ヲ内服スレハ、亦直ニ交感神

經ヲ刺戟シテ、脈管ヲ收縮セシム、之ヲ止血法ト稱ス、反射性刺戟ハ、精神ノ卒爾ニ感動スルナリ、例ハ、恐懼、驚愕等ノ如シ、其時ハ、顔面蒼白色ヲ呈ス、其他感冒ノ發熱前、憎寒戰慄スルモ亦恐クハ、交感神經ノ、反射性刺戟ニ由ル者ナラン、  
 症候ハ、貧血ノ多少ト、之ニ罹レル器械ノ異同ニ關涉シテ、同一ナラス、一器全ク血液ヲ失フキハ、假令一瞬時間ナルモ、直ニ死瘳ス可シ、然レモ、貧血ノ度輕微ナルキハ、蒼白色ヲ呈シテ、唯、寒冷ヲ覺ユルノミ、常ニ皮膚ニ於テ目撃スルカ如シ、若

クシク持續スレハ、其器遂ニ萎縮ス、筋肉ノ貧血ハ、收縮機ヲ妨碍シテ、次テ硬固トナリ、遂ニ麻痺ス、之ヲ動物ニ試ミルニ、其腹部ノ大動脈ヲ結紮スルハ、下肢ニ麻痺ヲ發ス、腦ノ貧血ハ、人事不省ヲ發シ、隨意運動ヲ失ヒ、呼吸緩徐トナリ、瞳孔散大シテ、遂ニ搖擗ヲ起ス、又外科手術ニ於テ、一側ノ頸動脈ヲ結締シテ、他側ノ半身不遂ヲ將來スルコトアリ、是偏腦ノ貧血ニ由ル、又動物ノ兩頸動脈ヲ結紮スルハ、劇シキ搖擗ヲ發シテ斃ル、又癲癇ハ、某因ノ交感神經ヲ刺戟スルニ由リ、腦

管中細動脈ノ筋層ニ痙攣性收縮ヲ起シテ腦質一時貧血スルヲ以テ痙攣ヲ發スル者ナリ時アリテ劇烈ノ症候ヲ顯ハシ命ヲ失フニ至ル然レ氏死後ニ之ヲ解屍スルニ腦中更ニ異狀ヲ見サルハ之カ為ナリ腺ノ貧血ハ其分泌減少スルノ他異症ナシトス

局發充血

局發充血ハ體中諸器ノ血量過饒トナル景況ニシテ病態ニ非ス某器唯生理的ノ景況ニ於テ興奮スル片ハ血液茲ニ輻輳ス例之ハ筋ノ收縮ス

ル片ハ膨大シテ其溫度昇騰シ胃ノ粘膜消化機能ノ際ニ方リテ血液充積スルカ如シ又特ニ著明ナルハ婦人ノ經行時ニ於ケル子宮及喇叭管ノ粘膜充血ナリ病理學的充血ハ之ヲ二種ニ區別ス實性充血虚性充血是ナリ血液ノ一部ニ向ヒテ盛ニ灌漑スル之ヲ實性トシ血液ノ容易ク流通スルヲ能ハスシテ一部ニ鬱滯スル之ヲ虚性トス乃生理的充血ノ如キハ皆實性充血ニシテ刺絡ヲ施スニ方リ上膊ヲ結縛シテ發スル者ノ如キハ虚性ニ屬ス

實性充血ハ之ヲ區別シテ二種トス、**第一種**ハ側枝充血ニシテ、惟、脈幹ノ側枝ノミ、充血スル者ナリ、此、脈幹中ノ血行、某因ノ為ニ妨碍ヲ蒙ルニ由ル、例之ハ、動脈瘤ノ為ニ其主幹ヲ結紮スルハ、其枝、極ノ充血膨大スルカ如シ、之ヲ髮細管系ニ發スルコトアリ、例ハ、後條細論アリ一ノ髮細管ヲ閉塞スルハ、血液盛ニ他ノ髮細管ニ向ヒテ灌漑スルカ如シ、眼球網膜ノ之ニ懼ルハニ方リ、檢眼鏡ヲ用ヒテ検査スレハ、其狀明視ス可シ、乃、眼底ノ中央ニ**蒼白點**アリ、是、コトハ、存在セ

ル地位ニシテ、其周圍充血シテ、紅色ヲ呈シ、溢血アルヲ看ル、又、静脈系ニ此種ノ充血ヲ起スコトアリ、例之ハ、腹水腫ノ為ニ、腹部深處ノ静脈壓迫セラルテ、血液流通スルコト能ハス、表部ノ静脈一道ヲ取ルコト以テ、著シキ膨大、テ、鼻之ヲ目撃スルカ如シ、總テ、局處貧血ニ在リテハ、近傍或ハ遠隔ノ部ニ、輔盈充血ヲ發ス、同器ニ在ル者アリ、他器ニ在ル者アリ、例之ハ、發熱ノ初期ニ方シテ、皮膚貧血シテ、戰慄ヲ發シ、同時ニ、腦肺腸等充血ス、或ハ讀書ニ耽ルハ、顔面充血シテ熱、下肢冷凍ス

ルカ如シ、又人工誘導方ヲ用ヒテ、輔盈充血ヲ起  
 ス可シ、例之ハ、芥子泥ヲ下肢ニ貼スルカ如シ、又  
 肺病ハ、多ク側枝充血ノ例ト為ス可キ者アリ、例  
 ハ、一肺、某因胸腔滲液ノ如シニ由リテ、壓迫セラレ、片  
 ハ、肺充血シ、肺氣腫ノ為ニ、一ノ髮細管、閉塞スル  
 片ハ、他ノ髮細管ニ充血ス、或ハ肺炎ニ罹リ、其一  
 部、炎性滲泄物ニテ、閉塞スル片ハ、他部ニ血液ノ  
 多ク灌漑スルカ如シ、皆咯血ヲ將來シ、氣管枝粘  
 膜ニ充血ヲ發シテ、粘液ヲ過多ニ分泌ス、故ニ肺  
 充血スル片ハ、常ニ必饒多ノ粘痰ヲ咯出スルナ

リ**第二種**ハ、尿管抗抵ノ減少ニ起因セル充血ニ  
 シテ、再之ヲ二種ニ分ツ、**甲**ハ尿管外ノ壓力、卒然  
 減却スルニ由ル、例之ハ、局部ニ吸角ヲ貼スル片  
 ハ、其部ノ空氣稀薄トナリ、氣壓減少スルヲ以テ、  
 尿管膨大シテ、血液充盈ス、或ハ腹水ヲ一時ニ排  
 除スレハ、腹部靜脈ノ外壓、頓ニ減少シ、血液ノ灌  
 漑旺盛シテ、為ニ腦ノ貧血ヲ發シ、眩暈或ハ搖擗  
 ヲ起ス、或ハ時アリテ、婦人ノ分娩過速ニシテ、同  
 症ヲ發スルカ如シ、分娩後、腹部ニ強ク繃帶ヲ施  
 之ヲ防ガニカ為ナリ

**乙**ハ尿管ノ筋層弛緩膨脹スルニ由リテ、血液ノ



灌溉スル者ニシテ之ヲ誘發スルノ方ニ様アリ、  
 一ハ直ニ交感神經ヲ麻痺セシメ、一ハ反射性ニ  
 麻痺セシム、此兩機少異ナク、恰貧血ヲ發スル機  
 轉ノ如シ、例ハ温熱ヲ皮膚ニ貼シ、或ハ交感神經  
 ヲ切斷スル等ハ、直ニ麻痺セシムル者ニシテ、免  
 頸部ニ於テ、交感神經ヲ切斷スレ喜怒羞恥ノ如  
 キ、精神卒爾ノ感動ニ由ル者ハ、反射性ニ麻痺ス  
 ルナリ、然レモ、必腦ヨリ反射スルニ非ス、或ハ知  
 覺神經ヨリ反射スルヲアリ、例之ハ、齒痛、偏頭痛  
 神經痛等ニ於テ、顔面潮紅スルカ如シ

症候ハ、血液ノ細尿管中ニ灌溉スルヨリ起ル、此  
 血液灌溉ハ、一小部ニ局スルヲアリ、或ハ廣ク諸  
 部ニ瀰蔓スルヲアリ、甲ヲ限局充血シルコムス  
 ト稱シ、乙ヲ瀰蔓充血シルコムスト稱ス、皮膚病ニ於  
 テ之ヲ見ル例之ハ、麻疹ハ、皮膚ニ無數ノ赤點ヲ  
 呈スルカ故ニ、甲種ニ屬シ、猩紅熱ハ、皮膚ノ全面  
 紅色トナルヲ以テ、乙種ニ算入ス、可キカ如シ、又  
 内臓中、甲種ノ例ヲ見ルハ、腎臟ナリ、腎ノ充血ハ、  
 大抵マルピキ氏胞内ノミニ限レリ、血液廣ク諸  
 部ニ灌溉スル時ハ、深赤色ヲ顯ハス、眼球結膜ニ

於テ看ルカ如シ試ニ指頭ヲ以テ此部ヲ壓スレ  
ハ赤色消褪シ指ヲ去レハ再赤色ニ復ス是充血  
ノ確徴ニシテ若溢血アル片ハ其色依然トシテ  
消失セズ皮下ニ色素ヲ沈著以テ皮膚病ノ充血  
ト溢血トヲ判別シ得可シ充血部ニ於テハ患者  
自ラ劇シキ脈搏ヲ覺ユ殊ニ動脈ニ於テ然リ例  
ハ頭痛ニ於テ頸動脈ノ搏動強キヲ覺ユルカ如  
シ又尋常搏動ヲ目撃セサル脈管ニ搏動ヲ覺ユ  
ルコトアリ例之ハ指頭ヲ損傷シテ其部ニ脈搏ヲ  
感覺シ或ハ齒痛ニ方リテ頰部ニ脈管ノ搏動ヲ

覺ユルカ如シ又充血部ハ營ニ患者ノ自ラ温熱  
ヲ感覺スルノミナラス寒暑針ヲ用ヒテ其増加  
ノ度測定ス可シ乃殆攝氏ノ三度ナリ某部ノ充  
血少時ヲ經レハ血中澄液分ノ滲洩ニ由リテ其  
部腫脹ス若粘膜ニ在ル片ハ滲泄液直ニ膜表ニ  
漏出ス例之ハ粘膜加答兒ニ於テ見ルカ如シ之  
ヲ試験上ニ徴ス可シ乃鼻腔粘膜ヲ輕々刺衝ス  
レハ充血シテ滲泄液ヲ洩出シ膜面ヲ濕スヲ見  
ル或ハ滲泄液ノ器械中ニ滲漏スルコトアリ所謂  
浮腫浮腫也是ナリ例之ハ眼球結膜紅之ヲ發スレ

ハ腫脹シテ角膜ノ周縁ヲ被覆シ或ハ皮膚之ニ  
罹リ又或ハ皮下結締織中ニ澄液ヲ滲漏シテ全  
身浮腫ヲ發スルカ如シ又時アリテ腦肺之ニ滲  
ル<sub>レ</sub>有リ或ハ滲泄液盲囊内ニ滲漏スル<sub>レ</sub>有リ  
例之ハ胸膜充血ニ於テ胸膜囊水腫ヲ發シ腹膜  
充血ニ於テ腹膜囊水腫ヲ起スカ如シ關節ノ充  
血モ亦關節膜内ニ滲泄液ヲ生ス其他心囊水腫  
腦室水腫陰囊水腫等皆此例ナリ總テ充血ハ諸  
器ノ機能ヲ亢盛スル<sub>レ</sub>アリ或ハ之ヲ沈衰スル  
<sub>レ</sub>アリ例之ハ腎ニ充血シテ尿ノ分泌旺盛シ  
過<sub>レ</sub>

度ノ飲料ニ由リテ充血シ尿ヲ唾腺ニ充血シテ  
分泌スル<sub>レ</sub>過多ナル<sub>レ</sub>アリ  
多ク唾液ヲ分泌シ皮膚ニ充血シテ發汗旺盛ス  
ルカ如シ又之ニ反シテ肺ノ充血ハ至細ノ氣管  
枝及氣胞ノ裡面ニ多ク粘液ヲ分泌シテ之ヲ被  
覆スル<sub>レ</sub>以テ瓦斯ノ交換十全ナラス胸部煩悶  
シ咳嗽シテ咯痰ス時アリテ劇症ナルハ咯血ス  
若ク久シク持續スレバ多ク澄液ヲ滲漏シ氣胞ヲ  
充填シ機能盡廢絶シテ斃ル之ヲ肺水腫ト云フ  
又腦ノ充血ハ神經中樞著シク興奮シ光響ノ感  
覺過敏ニシテ微弱ノ光響モ劇烈ニシテ視聽ニ

堪へス加之眼華耳鳴ヲ覺エ心神安穩ナラズ眩  
 暈ヲ發起ス時アリテ之ニ反シ神經中樞沈衰シ  
 テ嗜眠ヲ發シ輕キ昏耗ニ陥リ視聽昏瞶言語蹇  
 澁運動不遂ニシテ遂ニ搖擗ヲ發ス腎ノアライ  
 卜病ハ輒スレハ腦充血ヲ起シテ如此キ症候ヲ  
 發スルヲアリ蓋腦ノ興奮ハ其組織ノ充血ニ由  
 リ其沈衰ハ組織中ニ液ヲ滲漏シテ組織ヲ壓搾  
 スルニ由ルナラン又充血ハ疼痛ヲ起スモ多ク  
 ハ輕微ナリ然レモ稀ニ過劇ナルヲアリ例之ハ  
 齒痛ノ如シ皮膚充血スレハ先溫熱ヲ覺エテ刺

衝ヲ感シ次テ搔痒ヲ發ス其他充血ハ尿管破裂  
 ヲ來シ出血ヲ起スヲアリ例ハ腦肺ニ於テ看ル  
 カ如シ是專ラ尿管ノ患害アルニ由ル例之ハ老  
 者ノ尿管脆弱トナルニ由リテ卒中ヲ發シ易キ  
 カ如シ又卒然血管ノ外壓ヲ除クニ由リテ出血  
 ヲ起スヲアリ例之ハ腹水ヲ頓ニ排除シテ腹腔  
 内ニ出血シ或ハ内障眼ノ水晶體ヲ急ニ除去シ  
 テ網膜及脈絡膜ニ出血スルカ如シ尋常充血ハ  
 一時ノ者ニテ急ニ發シテ忽消散ス然レモ若ク  
 シク持續シ或ハ頻々反復スレハ遂ニ久患ヲ貽

シ、其部ノ血管常ニ膨大シ、營養機旺盛シテ、肥大  
 スルニ至ル例之ハ、筋骨皮膚等ニ於テ見ルカ如  
 シ、又器械ノ官能常ニ障碍ヲ蒙ルヲアリ、例ハ、暴  
 飲ニ由リテ、腦ノ官能、妨碍セラレ、痴鈍トナルカ  
 如シ、總テ充血ハ、久シク持續スル片ハ、遂ニ變シ  
 テ炎トナル、

虚性充血ハ、血液一部ニ滯溜シテ、流通シ難シ、此  
 静脈循環ノ妨碍ニ由ル例之ハ、上膊ヲ強縛スレ  
 ハ、其表部ノ静脈ニ、血液滯溜スルカ如シ、是、静脈  
 充血、或ハ器械的充血ノ稱ヲ得ル所以ニシテ、其

因數多ナリ、**甲**ハ、心筋收縮力衰弱ニ因ス、例之  
 ハ、替留熱病、殊ニ、泰衰度熱、膿熱等ノ患者ニ於テ  
 見ルカ如シ、是、心力衰憊シ、動脈末梢ノ血液、髮細  
 管ノ抗抵ヲ抑制シテ、進ムヲ能ハス、静脈ニ於テ  
 モ亦然ルニ由ル、故ニ、髮細管及、静脈中ニ血液鬱  
 積ス、夫、平常血液ノ、髮細管ヲ通過シテ、静脈ニ入  
 リ、循環スル者ハ、後方ノ壓勢ニ依頼スルヲ以テ、  
 若、心力減衰シテ、後方ノ壓勢、劣弱トナル片ハ、血  
 液ノ、静脈中ニ滯溜鬱積スルヲ、論ヲ俟タス、乃、澄  
 液、多ク、脈外ニ滲漏シテ、浮腫ヲ發ス、尋常熱病ノ

末期或ハ肺勞患者ノ足跗浮腫スルハ即此理ナ  
リ、如此ク血中澄液ヲ失フハ血液濃厚トナリ  
テ注流容易ナラス、鬚細管中ノ循環殆歇止シテ  
其部藍色ヲ顯ハシ、遂ニ壞疽ニ陥ル者トス〔乙〕ハ  
尿管ノ抗抵偏勝シ、血液之ヲ抑制スルヲ能ハサ  
ルニ起因ス、例之ハ尿管ノアトニカヲ失ノ如  
シ、是尿管筋層ノ收縮力減殺スルニ由リテ、血液  
細血管内ニ鬱積シ、為ニ強ク抗抵ヲ受ケ、流通怠  
慢シテ、緩徐トナリ、遂ニ血液充積ス、又動脈慢性  
炎ノ為ニ、其裏面粗糙トナリ、尿管變硬スルハ、

尿管ノ摩擦増加シテ、其收縮十全ナラサルヲ以  
テ、血行怠慢シテ、静脈充血ヲ將來ス、〔丙〕ハ血液重  
カノ偏勝ニ由ル、故ニ人若クシク、同位置ヲ保ツ  
片ハ、為ニ充血ヲ發ス、殊ニ下肢ニ多シ、例之ハ、椅  
子ニ坐シテ、久シク位置ヲ轉ゼサレハ、直腸充血  
シテ、痔血ヲ起シ、或ハ佇立久シケレハ、下肢ノ靜  
脈膨脹シテ、遂ニ浮腫ヲ發スルカ如シ、若シ力減  
衰アトニシ等ノ因ヲ具有スレハ、殊ニ重力ノ為  
ニ障害ヲ蒙リ易シ、例ハ、泰斐度後ノ患者、久シク  
仰臥スレハ、血液背部ニ鬱積シテ、肺ニ充血ヲ發

シ又老人或ハ衰弱セル者一病ノ為ニ平臥スル  
一久シケレハ腦脊髓肺等ニ虚性充血ヲ起スカ  
如シ<sup>丁</sup>ハ静脈ノ外部ヨリ壓搾ヲ蒙ルニ基因ス  
例之ハ妊婦ノ子宮膨大ノ為ニ陰阜及<sup>三</sup>下肢ノ静  
脈充血シ<sup>妊婦ニ於テ屢目撃スル所ニ</sup>或ハ腸中  
ニ糞塊ノ滯積スルニ由リ静脈ヲ壓迫シテ痔血  
ヲ將來シ或ハ腫瘍静脈近傍ニ生シテ其壓搾ノ  
為ニ充血ヲ發シ或ハ皮膚ノ瘢痕縮小スルニ方  
リ静脈ヲ壓迫シテ充血ヲ起スカ如シ<sup>例ハ腋</sup>  
ヲ發スルカ<sup>如シ</sup>其他組織萎縮ノ壓<sup>ニ</sup>由ル<sup>ア</sup>

リ例之ハ肝臟萎縮シテ其髪細管ノ循環ヲ妨碍  
シ門脈系ニ充血ヲ起シテ遂ニ之ヲ腸脾等ニ波  
及シ時ニ痔血ヲ誘發スル<sup>ア</sup>ルカ如シ<sup>戊</sup>ハ<sup>心</sup>  
ロ<sup>ン</sup>ボ<sup>ス</sup>静脈ヲ閉塞スルニ由リテ發ス<sup>癸</sup>ハ<sup>心</sup>  
臟瓣膜病ニ起因ス持<sup>ニ</sup>僧帽瓣膜ノ疾患ニ由ル  
一多シ此瓣若其閉鎖緊切ナラサルカ或ハ其孔  
狭小ナルハ肺充血ヲ發ス是閉鎖全カ<sup>ニ</sup>  
レバ左下房ヲ收縮ニ方<sup>テ</sup>血液上房ニ向<sup>テ</sup>返  
流不可<sup>ク</sup>若其孔狹隘ニ失<sup>ス</sup>レハ左上房ヲ收縮  
ニ方<sup>リ</sup>テ血液盡<sup>テ</sup>下房ニ來<sup>ラ</sup>ス上房中ニ殘溜<sup>ル</sup>

ルヲ以テ先左上方ヨリ肺静脈ニ充血シ次テ肺  
 動脈右下房ニ血積ヲ發シ遂ニ之ヲ下行大静脈  
 ニ波及ス通常心病ノ患者恆ニ咯痰スル者ハ肺  
 充血シテ多量ノ粘液ヲ分泌スルニ由ル心臟ノ  
 疾病ハ盡肺充血ヲ併發スレモ瓣膜ノ疾患ニ於  
 テハ殊ニ發起シ易シトス  
 徴候ハ實性充血ニ比スレハ又シク持續ス而シ  
 テ其原由多クハ驅除スルコト能ハズ例之ハ心臟  
 諸病ノ如ク唯其發症ヲ減殺ス可キノミ而シテ  
 實性ノ如ク速ニ發ヒズ漸徐ニ發シ來ル其主要

ノ徴候ハ静脈膨脹シテ其部藍色ヲ呈シ實性充  
ニ反シテ紅色ヲ呈ス静脈充血動温度減却ス是  
 其器ノ官能衰憊シテ組織ノ新陳代謝ノ機能減  
 少ス一バナリ又尿管破裂シテ出血ヲ起ス例之  
 ハ痔血ノ如シ又澄液ヲ滲漏シテ水腫或ハ浮腫  
 ヲ發ス例之ハ肺或ハ皮膚ニ於ケルカ如シ又肺  
 或ハ腸ノ粘膜加答爾ヲ誘起ス其他各處ノ血行  
 歇止由リテ壞疽ニ變スルコトアリ總テ虚性充  
 血ハ實性ノ者ニ比スレハ治シ易カラズトス  
 小口ト曰ムボク及至ンボク内

原病學通論  
 卷之四  
 十一  
 三  
 三



トロムボシスハ生活セル脉管内ニ於テ、血中纖維ノ凝結シテ血行ヲ障碍スルヲ謂フ、心臟、動脈、靜脈、髮細管ニ於テ之ヲ見ル時トシテ、水脈ニ於テ、淋巴中ノ纖維素凝結シテ、之ヲ發スルヲアリ、然レモ、髮細管、水脈ニ在リテハ、大ニ緊要ナラス、其始メテ發スルキハ、トロムボシ<sup>血塊</sup>ノ一部、脉壁ニ固著シ、他部ハ遊離シテ、脉管ヲ閉塞ス、其閉塞全カラサル者アリ、或ハ全ク閉塞シテ、血行ヲ遏止スル者アリ、此トロムボシハ、時アリテ増大セス、初生ノ形狀ヲ保ツトアリ、或ハ新凝ノ纖維素層ヲ

ナシテ、其面上ニ堆積シ、增長スルヲアリ、之ヲ延長トロムボシト云フ、例之ハ、分娩後、胞衣剝離ノ痕ニ子宮ノ靜脈、破斷シテ、開口スルニ方リテ、トロムボシヲ生シ、延長シテ、遂ニ脚ノ靜脈、或ハ腹部大靜脈ニ達スルヲアリ、或ハ時アリテ、心ノ右房ニトロムボシヲ生シ、延長シテ、肺動脈ニ至ルカ如シ、凡テトロムボシノ延長ハ、血行ノ方向ニ隨フヲ以テ、動脈ニ在リテハ、心臟ヨリ末稍ニ向ヒ、靜脈ニ於テハ、末稍ヨリ中心ニ向ヒテ延長ス、此トロムボシハ、尋常屍體ニ見ル所ノ血塊ト區

別セサル可カラス、屍體ノ血塊ハ、柔軟ニシテ彈性ヲ有シ、白色或ハ淺紅色ナリ、又闇褐色ナル者アリ、是、暗色ニ變セル血球ヲ緩ク脉壁ニ接著シ、容易ニ剝離ス可シ、纖維素ト赤白兩種ノ血球トヨリ成リ、主トシテ、心臟右房、肺動脈、或ハ靜脈ニ於テ之ヲ見ル、尋常動脈中ニハ、之ヲ見ルナシ、是、後、動脈收縮シテ、血液、之ニ反シテ、ドロシボシ、盡、靜脈中ニ在レハナリ、之ニ反シテ、ドロシボシハ、纖維素ノ疑片、層々重疊シテ成ル、故ニ之ヲ横斷スレハ、各層ノ分界、判然見ル可シ、是、初生ノ血塊、核トナリテ、其面上、漸次ニ纖維素ノ新層ヲ沈著ス、

ルヲ以テナリ、之ヲ尋常ノ者ニ比スレハ、堅剛、灰白色ニシテ乾燥シ、血球ノ皺縮シテ星形ヲナセル者ヲ含有ス、然レモ、新生ノ者ハ、尋常血塊ノ状態ヲ保ツ、其脉壁ニ附著スルヲ極メテ強固ニシテ、之ヲ剝離スレハ、其痕甚粗糲ナリ、

ドロムボシノ變化ハ三様ナリ、第一、軟化、ドロムボシノ軟化スルハ、其中心、先、柔軟トナリテ、膿様ノ稠液ヲ生ス、之ヲ取リテ、顯微鏡的ニ検査スルニ、膿球ヨリナルニ非ス、蛋白分子、脂肪分子、及皺縮セル血球ヨリナル、而シテ全塊、盡軟化スレハ、

消亡ス、或ハ中心ニ赤色ノ腐敗様物柔弱ニシテ  
 シ如ク生シ、全塊盡之ニ化スレハ、亦消失ス、是膿熱、  
 腐敗膿熱、病院壞疽等ニ於テ見ル所ナリ、第二、結  
 締織化生、動脈或ハ靜脈ヲ結締シテ、其癒ユル時  
 或ハ割傷ノ治スル時ニ之ヲ見ル、其時ハ、トロン  
 ボシ化シテ、結締織トナリ、血管ノ截口ヲ閉鎖ス、  
 今其變化ノ狀ヲ細述セシ、若、一個ノ動脈、割傷ヲ  
 受ケテ、截斷セラレ、片ハ其截痕ニ「トロンボス」  
 ヲ生シ、延長シテ、第一側枝ニ至リ、出血閉止ス、此  
 「トロンボス」ハ其末端圓錐形ニシテ遊離シ、惟、底

部ノミ、脈壁ニ附著ス、而シテ漸次ニ縮小シ、塊中  
 新ニ髮細管網ヲ生シテ、脈壁ノ髮細管ト吻合ス、  
 其後更ニ甚、縮小シテ、結締織ニ化シ、唯、細小ノ瘢  
 痕ヲ貽スノミ、次テ側枝漸次ニ増大シテ、遂ニ巨  
 幹ニ齊シ、巨幹ノ末稍ハ、盡、變脂スルヲノリ、或ハ  
 一部ノミ、變脂シテ、本末ノ二部、側枝ヲ以テ連續  
 スルヲアリ、動脈ヲ結紮スルキモ亦然リ、靜脈ノ割  
 傷ニモ亦之ヲ見ル、例之ハ、刺絡ノ後、其截痕ニ血  
 塊ヲ生シ、増大シテ、殆、血行ヲ妨タルニ至ルヲア  
 ルモ、後逐次ニ縮小シテ、終ニ細小ノ瘢痕ヲ貽ス

カ如シ、刺絡後ノ繃帶ハ、血塊ノ増大ト、溢又静脈  
血ノ腐敗トヲ防カシカ爲ナリ  
 巨幹ヲ截斷スル片ハ、其中心部ニ於テ、截痕ト、第  
 一側枝トノ間、全ク血液ヲ失ヒ、壓搾ヲ受ケテ、扁  
 平トナリ、脈壁相接ス、而シテ側枝ヨリ來レル血  
 液、返流セントスレハ、脈中ノ瓣膜、截痕ニ向ヒテ  
 閉鎖シ、能ク出血ヲ防護ス、故ニ静脈ノ創傷ハ、大  
 幹ニ在リト雖、結締ヲ要セス、爾後截痕ノ血塊、漸  
 次ニ増大シテ、之ヲ閉塞シ、變化スルコト、動脈ニ異  
 ナラス、其末梢部ニ於テハ、截痕ノ血塊、増大變化  
 スルコト、亦動脈ノ如シ、此血塊ノ静脈ニ發生スル

ハ、動脈ニ比スレバ、容易ナリ、是、血液循環ノ緩慢  
 ナルカ故ナリ、**第三、化石灰**多ク、静脈膨脹ニ於テ、  
 之ヲ見ル、其始メテ發スルハ、血塊、静脈ノ膨大部  
 ニ沈著シ、久時ヲ經過スレハ、遂ニ化シテ、石灰質  
 トナル之ヲ**静脈石**ト云フ、  
**原因**之ヲ區別シテ、二種トス、曰ク血液滯溜、曰ク  
 脈壁組織ノ變化、是ナリ、  
**血液滯溜**ノ、トロシボシスヲ誘起スル、**第一**ハ、脈  
 管ノ壓搾ヲ蒙ルニ由ル、爲ニ血行緩徐トナリ、纖  
 素凝結シテ、之ヲ生ス、例ハ、腫瘍、癰疽、或ハ創傷、溢

血ノ壓迫二、血管割傷ヲ受クレハ、血液、管外ニ溢出  
或ハ動靜二脉ヲ結締スルニ由ルカ如シ第二ハ  
脉管ノ割傷ニ之ヲ發ス、脉管割傷ヲ蒙レハ、必、血  
液滯溜シテ、血塊ヲ形ツクリ、出血ヲ遏止スルヲ、  
既ニ述フルカ如シ、**第三**ハ、心臟或ハ脉管ノ膨大  
ニ之ヲ發ス、膨大セル脉管ハ、血行怠慢シテ、纖維  
ノ凝結ヲ將來シ易シ、殊ニ脉壁粗糙ナル片ニ然  
リ、例之ハ、動脈膨大動脈ノ如シ、此症ニ生スル血  
塊ハ、唯、膨大部ノミヲ充填スルヲ以テ、孔徑ハ、他  
部ニ超ユルヲナシ、時アリテ、血塊堅硬トナリ、遂

ニ其部ノ脉搏觸知ス可カラズ、靜脈膨大モ亦同  
シク血塊ヲ生シ、經時ノ後、化シテ石灰質トナル、  
所謂靜脈石是ナリ、又心ノ右房ニ於テ然ルヲア  
リ、**第四**ハ、心ノ收縮力減殺スルニ由ル時ニ末稍  
ノ脉管内ニ血液滯溜シテ、凝血ヲ生ス、例之ハ、室  
扶斯慢性結核ノ如キ重病後、或ハ老者ニ於ケル  
カ如シ、老者、或ハ重病後ノ人ハ、心カ減衰シ、足脚  
力如シ、ノ血行、妨碍ヲ蒙リ、血液凝結シテ、遂ニ壞  
疽ニ  
**第一** 脉壁組織ノ變化トロニボシク起ス、  
管裏面ノ粗糙トナル片ニ在リ、例之ハ、心内膜炎

急性糜爛質私ニテ其内皮剝離シ膜面粗糙ト  
 ナリテ恰顆粒ノ如シ故ニ纖維素茲ニ凝著シ易シ  
 或ハ之カ為ニ潰瘍ヲ起シ其面ノ粗糙トナルヲ  
 以テ亦纖維素容易ク凝著ス或ハ動脈アテロシ  
 慢性炎ヲ發シ為ニ脈壁ニテ動脈ノ内面粗糙ト  
 硬固トナル者ヲ言フニテ動脈ノ内面粗糙ト  
 ナリ大血塊ヲ生スルカ如シ第二脈管内ニ異物  
 ノ竄入スルニ由ル例之ハ試ニ動物ノ脈管内ニ  
 細針ヲ刺入シ或ハ霰丸碎骨片ノ竄入スルカ  
 其周圍ニ纖維素ノ凝著スル極メテ容易ナルカ  
 如シ第三化學的諸品例之ハ腐蝕剝多私礦酸等

ノ如シ若脈管内ニ在ル片ハ必血液成分ト脈壁  
 組織トヲ變スルヲ以テ凝血ヲ生ス

徵候トロンボス全ク血管ヲ閉塞セサル片ハ其  
 症候發現セサルアリ例之ハ大動脈ニトロン  
 ボスハ生シ少シモ血行ヲ妨碍セリル片ノ如  
 シ又脈幹ノ一部ヲ閉塞スト雖其側枝數多ナル  
 ヲ以テ血行障碍ナキ片ハ亦然リ例之ハ四肢深  
 處ノ靜脈ノトロンボスハ長部ノ靜脈之ニ代  
 ルヲ以テ現症ナク唯表部靜脈ノ稍充血スルヲ  
 見ルミ又子宮膀胱等ノ靜脈叢ハ其數部ニト

原病學通論 卷之四 三十一

ロンボスヲ生スレハ血液他枝ヲ流通シテ少シ  
モ障害ヲナサバカ如シ若表部ノ静脈トロン  
ボスヲ生スレハ脉管膨張シテ常態ニ比スレハ  
堅實トナリ帶藍赤色ヲ呈シ其壓迫ニ由リテ微  
痛ヲ覺ヘ周圍ノ結締織ニ澄液ヲ充填ス時アリ  
テ周邊ニ發炎ス例之ハ痔静脈ニ於ケルカ如シ  
此炎ニ由リテ肛圍ニ膿瘍ヲ生シ劇痛スレトア  
リ又脚ノ静脈膨大シ同方ヲ以テ發炎シ膿瘍ヲ  
發スル若静脈大幹全ク閉塞スルキハ虚性充血  
ノ諸症ヲ顯ハス例ハ股静脈或ハ腸骨静脈ノ血  
行閉止スル片ハ同側ノ一脚浮腫ヲ發ス稀ニ兩

脚共ニ浮腫スルヲアルカ如シ其發スルハ先踝  
部ヨリス但トロンボス全ク血管ヲ閉塞スルニ  
非レハ然ラス尋常ハ疼痛ナシト雖其静脈神經  
ニ直接セル部ニ在リテハ疼痛ヲ併發ス此症多  
クハ婦人ノ分娩後ニアリテ全脚疼痛スルニ至  
ルハ婦人分娩後トロンボス發生ノ方トロンボ  
スハ前条既ニ細論アリ故ニ贅セズトロンボ  
ス卒然静脈ニ生シテ數多ノ側枝ニ蔓延スル片  
ハ充血シテ溢血ヲ起スヲ見ル此部ハ尋常壞疽  
ニ陥ルヲナシト雖若發炎スルキハ壞疽ヲ發ス  
ルヲアリ例之ハ皮膚ノ羅斯葶熱等ニ於テ見ル

原病學通論 卷之四 三十一

原病學通論 卷之四 二七一 三友會

カ如シ、若ク久シク持續スルキハ、近傍諸部大ニ肥大ス、嘗テ一女アリ、股動脈ノトロンボシハ、由リ、足脚非常ニ肥大シテ、腰圍ニ齊シキニ至レリ、内臟靜脈ノトロンボシハ、特異ノ症候ヲ現發セス、故ニ唯之ヲ誘起ス可キ原因ノ有無ヲ以テ、察知ス、ヘキノミ、例之ハ、數年間、耳濕ニ罹レル人、卒然昏眩ノ如キ腦病ノ徵候ヲ發スルキハ、顛顛骨ノ骨疽ニ由リテ、頭顛ノ靜脈竇ニトロンボシヲ生ヒシヲ推知ス、然レハ、顛顛骨ノ骨疽アルヲ預知セサレハ、之ヲ察スルヲ能ハス、或ハ初生兒

ノ、臍輪炎ヲ發スルキ、之ヲ臍靜脈ニ波及シテ、門脈ニトロンボシハ、發シ、黃疸及腹部浮腫ヲ將來スト、雖唯此等ノ現症ヲ以テ、其トロンボシニ因スルヲ察知ス可キニ非ス、臍炎アルヲ以テ、確然推斷シ得ルカ如シ、故ニ内臟靜脈ノトロンボシハ、適切善良ノ診斷ヲ得ルヲ難シ、必諸種ノ症候ヲ比較參考セサル可カラズ、靜脈ノトロンボシハ、危險症ヲ誘起スルハ、其軟化ト、延長トニ在リ、軟化スルキハ、破潰シテ、エンボシヲ生シ、延長スル時ハ、大幹ノ血行ヲ妨碍スレバナリ、

原病學通論 卷之四 二七一 三友會



尋常外傷ニ於ケル静脈ノトロシボスノ軟化ト  
延長トヲナサミルハ幸福ト謂フ可シ如何トナ  
レハ其創口ヲ閉鎖シテ出血ト腐敗性惡液ノ吸  
收ヲ防禦スレハナリ若軟化スルキハ創孔再出  
血ス可シ動脈ノトロシボシハ充血ヲ起サス  
貧血ヲ將來ス然レモ側枝ノ血行旺盛シテ能ク  
其部ノ壞疽ニ陥ルヲ防護ス稀ニ壞疽ヲ發スル  
トアリ例之ハ股動脈ヲ結締スルニ方リテ下肢  
壞疽ニ陥ルカ如シ是最稀ニシテ恒例ニ非スト  
雖其然ル所以ハ蓋脈幹ノトロシボス延長シテ

側枝ニ蔓延シ盡之ヲ閉塞スルニ由ルナラシ故  
動脈結締ハ須ク側枝ノ下部ニ於テ多ク取ル部ニ  
施ス可シ若側枝ニ近シテ結締スルハトロン  
ボス延長シテ側枝中ニ蔓延シテ之ヲ閉塞スル  
患アリ若トロンボス延長シテ大セザルハ結締部  
ヲ充分ニ閉鎖スルハ能ハズ又動物ハ體中ノ動  
脈ヲ殆盡結締スルモ壞疽ヲ起サス嘗テ犬ヲ以  
テ之ヲ試験セシニ漸々諸部ノ動脈ヲ更換シテ  
結締シ遂ニ下腹大動脈ヲ結締シテ一年ヲ經過  
スレトモ少シモ壞疽ヲ發セサルナリ以テ徵ス  
ルニ足レリ動脈ノトロンボスハ若軟化スレハ  
出血ヲ發スルヲ以テ大ニ危險ナリト云ハ

トロンボシスハ、確明ノ徵候ヲ現發セス時アリ  
テ、聽診ヲ以テ、辨音ト合併シテ、一種ノ騷鳴ヲ聞  
ク「アル」ノミ、故ニ此症、モ亦唯、之ヲ誘起ス可キ  
源由ノ有無ヲ以テ、推考シテ、診斷ス可キノミ、例  
之ハ、心内膜炎、心筋肉炎、心虚性膨大等ノ有無ヲ  
以テ、察知スルカ如シ、此症若、軟化スレハ、動脈ニ  
「エ」ンボシヲ生ス、例之ハ、心膨大症ニ罹レル人ア  
リ、腦充血ノ症ナク、急ニ卒倒スル者ハ、其心臟ノ  
「ト」ロンボシ軟化シテ、腦内ニ「エ」ンボシヲ生スル  
ヲ推知スルカ如シ、故ニ心臟ノ「ト」ロンボシスハ、

唯、聽診ニ由リテ、辨音ニ騷鳴ヲ併發スルヲ以テ、  
決定ス可キノ非ス、「エ」ンボシノ症候、繼發シテ後、  
始メテ確然診斷シ得可シ、「ト」ロンボシノ症候、  
ハ、延長シテ、静脈ニ至ルニ非レハ、危篤ナラス、  
水脈ノ「ト」ロンボシスハ、其管ヲ膨大迂曲シテ、蛇  
行狀ヲナサシム、特ニ、「ト」ロンボシノ症候、  
及、卵巢等ニ發ス、是亦、「ト」ロンボシノ症候、  
「エ」ンボシ若、結締織ニ化セサル者ハ、  
軟化シテ、破碎シ、血行ニ隨ヒテ、他部ニ到リ、其部  
ノ脉管ヲ栓塞ス、之ヲ「「エ」ンボシ」ト稱ス、大小長短、

原病學通論 卷之四 二十四

齊シカラスニ乃至十二センチメートルヲ常ト  
 ス或ハ手指大ナル者アリ或ハ最小ニシテ顯微  
 鏡ノカラ假ラサレハ看ルヲ能ハサル者アリト  
 ロンボスヲ生シテエンボムノ源トナル部位ハ  
 静脈系ニ在リテハ專ラ股静脈腸骨静脈腎静脈  
 頸静脈頭顱静脈竇心臟右房等ニ在リトス動脈  
 系ニ於テハ殊ニ大動脈アオ動脈大幹心臟左房  
 等ナリトエンボムノ静脈ニ生スル片ハ心ノ右房  
 ニ入り遂ニ肺動脈ニ到ル特ニ門脈ニ在リテハ  
 肝ノ門脈系鬚細管ニ至リテ止リ大静脈ヲ經テ

心ノ右房ニ到ルヲナシ又肺静脈ニ生スル片ハ  
 心ノ左房ニ入り大動脈ニ出テ體中一部ノ細動  
 脈或ハ鬚細管ニ到リテ止ル此エンボムノ運動  
 ハ直ニ動物體ニ試験シテ徴知スル所ニシテ亞  
 鉛華木炭ノ如キ物質ノ粉末ヲ取リ静脈ニ注射  
 スレハ肺ノ鬚細管ニ至リテ止リ之ヲ動脈ニ注  
 入スレハ體中諸部ノ細動脈或ハ鬚細管ニ終ル  
 ヲ見ル  
 エンボムヲ形成スル物品支エンボムハ許多ノ  
 物品ヨリ形成ス可シ第一通常最多キハ纖維素ノ

凝塊ニシテ軟化セルトロンボスノ破碎セル者  
 トス、纖維素ノ凝塊ニ種アリ、一ハ健康纖維ヨリナ  
 リ、一ハ腐敗性ニ變化セル纖維ヨリナル、共ニ  
 シボトヲ生スレトモ、其作用同シカラス、甲ハ唯  
 尿管ヲ栓塞スルノミ、乙ハ、管ニ尿管ヲ栓塞スル  
 ノミカラス、又其部ニ腐敗性變化ヲ起ス、如此キ  
 正シボトハ、膿熱腐敗膿熱、病院壞疽、尊熱等ニ於  
 テ見ル所ナリ、例之ハ、脚ノ創傷ニ於テ、創痕ノ  
 ロンボス軟化シテ、腐敗性トナリ、破碎シテ、肺腦  
 等ニ到リ、正シボトヲ大シテ、其部ニ壞疽狀潰瘍

ヲ生スルカ如シ、**第二**ハ心ノ瓣膜、或ハ肉柱ノ碎  
 片ナリ、是瓣膜、肉柱ノ炎ノ為ニ、石灰質、或ハ骨質  
 ニ變シ、或ハ脂肪ニ變性シテ、破碎スルニ由ル、之  
 總稱シテ、アテロスコト云フ、尋常老人ニ多  
 ク、其尿管ノ、硬固トナル者モ亦此理ナリ、又尿管  
 ノ内層同因ニテ破碎シ、正シボトヲ發スルヲア  
 リ、**第三**ハ尿管、或ハ心房ノ内層ノ疾患ヨリ生セ  
 ル物品ニ由ル、例之ハ、心内膜炎ニテ、瓣膜ノ内皮  
 剥脱シテ、顆粒狀物ヲ生シ、其一分破碎シテ、正シ  
 ボトトナリ、或ハ尿管ノ裏面ニ癌腫ヲ生シ、其一  
 分剥離シテ、正シボトヲ發スルカ如シ、又一器、癌

腫ニ罹リテ他器ニ之ヲ生スルモ亦此理ニ由ル  
 之ヲ**病毒轉移**ト稱ス例ハ眼球癌腫ニ罹リ之ヲ  
 截除シテ後肺或ハ肝ニ再癌腫ヲ發スルカ如シ  
 此「**エンボシ**」性癌腫ハ尋常ノ者ト區別セサル可  
 カラス「**エンボシ**」性ノ者ハ一部ニ生スレハ近傍  
 ノ諸部モ亦數多ノ小癌腫ヲ散生ス是癌腫ノ碎  
 片「**エンボシ**」トナリテ血行ニ運輸セラル、ヲ以  
 テナリ**第四**ハ初メ脉管外ニ在リテ遂ニ脉壁ヲ  
 穿通シ管中ニ竄入セル物品ニ由ル例之ハ膿瘍  
 ノ如ク初メ脉管外ニ生シ漸次ニ脉壁ヲ穿テテ

管中ニ入り血液ノ為ニ他部ニ輸送セラル故ニ  
 亦**病毒轉移**ノ一トリ**第五**ハ寄生動物絲蟲見血  
 脉内ニ入り「**エンボシ**」ヲ發ス殊ニ肝肺等ニ多シ  
**第六**ハ創傷ニ由リテ脉管ニ竄入セル物品ニ由  
 ル例之ハ脂片碎骨片或ハ空氣ノ如シ若碎骨片  
 脉壁ヲ穿通スル片ハ近傍蜂窩織ノ脂肪モ亦共  
 ニ脉管内ニ竄入ス可シ空氣モ亦管中ニ竄入シ  
 血行ニ循ヒテ心腦肺等ニ到リ為ニ卒然死斃ス  
 ルトアリ是蓋空氣腦ノ髮細管ニ集積シ血液缺  
 亡スルニ由ルナラン大氣ノ最竄入シ易キハ心  
 臟近傍ノ創傷ナリ殊ニ頭

静脈ニ於テ  
 然リトス  
 第七ハ、血球、破潰シ、色素血中ニ遊離  
 シテ、エンボリヲ成ス、例之ハ、コラリヤ熱ニテ、血  
 球多ク破潰シテ、脾中ニ集積シ、其色素、血液循環  
 ニ隨ヒテ、門脈系ニ到リ、遂ニ肝ニ至ルカ如シ、其  
 他疾病ノ為ニ種々ノ物質、血行ニ由リテ、諸部ニ  
 輸送セラル、コアリ、例之ハ、黄疸ニ於テ、胆汁色  
 素ノ皮膚、皮下組織、腎、或ハ粘膜等ニ到リ、或ハ痛  
 風ニ於テ、尿酸ノ、專ラ關節ニ到リ、或ハ骨疾ニ於  
 テ、石灰塩ヲ血中ニ吸收シ、肺、腎等ニ運輸スルカ  
 如シ、又藥劑ノ、血中ニ吸收セラレテ、某部ニ到ル

コアリ、例之ハ、硝酸銀ノ、血中ニ入ルキハ、皮膚ニ  
 黒點ヲ呈シ、鉛ノ血中ニ入ルキハ、齒齦ニ到ルカ  
 如シ、如此ク血液ノ、諸部ニ運輸スル物品ハ、之ヲ  
 精密ニ論スレハ、皆一種ノ、エンボリニ他ナラス、  
 豈特纖維素ノ凝塊ノミナラン、然レモ、各異ノ物品  
 ハ、脈管ヲ閉塞スル者アリ、或ハ否ラサル者アリ、  
 持ニ血管ヲ閉鎖スル者ハ、纖維素ノ凝塊ナリ、而シ  
 テ多クハ、卒然身體ヲ運動スルニ由リテ、ドロソ  
 ボス、剥離シテ、之ヲ發ス、例之ハ、心臟「ドロソ」  
 スノ患者、静居スレハ、恙ナシト雖、卒然動作スル

原病學通論  
 卷之四  
 二十七  
 三  
 三

ニ由リテ卒倒シ、死スルカ如シ、是「トロンボス」剥  
 離シテ、全ク血管ヲ栓鎖スルニ由ルナラン、右ノ  
 「エンボス」如此ク、尿管ヲ全ク栓鎖スル「ア」レ氏、  
 或ハ其半ヲ栓塞シテ、全カラサル者アリ、又其大  
 小一ナラス、大ナル者ハ、大血管ヲ閉塞シ、小ナル  
 者ハ、細脈ヲ栓鎖ス、其最小ニシテ、顯微鏡ノカヲ  
 假ラサレハ、看ル「能」ハサル者ノ如キハ、髮細管  
 ニ到リテ、之ヲ栓鎖ス、或ハ一ノ髮細管系ヲ過キ、  
 次ノ髮細管系ニ至リテ、止ル者アリ、例ハ、肝ノ髮  
 細管系ヲ通シテ、肺ノ髮細管ニ到ルカ如シ、是、肝

ノ髮細管ハ、肺ノ髮細管ヨリ、大ナレハ「ナ」リ、若、大  
 塊ナレハ、其重量ノ為ニ、器械ノ下部ニ到ル、例之  
 ハ、肺ニ入ルモ亦其下葉ニ到ルカ如シ、而シテ皆  
 必、大管ヲ擇ヒテ通ス、例之ハ、心ノ左房ヨリ出ル  
 者ハ、大動脈ヨリ、腸骨動脈ヲ過キ、股動脈ニ入り  
 テ、其細枝ヲ閉塞スルカ如シ、若、小塊ナレハ、多ク  
 ハ、頸動脈、或ハ脾、腎等ノ動脈ニ入ル、特ニ頸動脈  
 ニ入ル者ハ、内頸動脈ヲ過キ、腦ノ中央動脈ニ  
 到ルヲ常トス、其左方ヨリ出ル者ハ、專ラ路ヲ左  
 方ニ取り、右方ヨリ出ル者ハ、右方枝「極」ニ進ムヲ

常トス、静脈ノ「エ」ンボムハ、右房ヨリ肺動脈ニ入  
 リ、其右枝ヲ通シテ、肺ニ到ル、是、右枝ハ、左枝ヨリ  
 大ナレハナリ、或ハ肺ヲ通過シテ、脾、肝ニ至リテ  
 止マル、是、恐クハ、肺動脈ノ末稍、髮細管ヲナサス  
 シテ、直ニ静脈ニ連繋スル者アリテ、之ヲ通過ス  
 ルナラン、

「エ」ンボムノ變形ハ三種ナリ、**天**盡吸收セラレテ、  
 其部ノ血行恢復ス、**地**トロンボスノ如ク結締織  
 化シテ、全ク局部ノ血行ヲ遏絶ス、**人**軟化シテ、  
 第「エ」ンボムノ源トナル、其時ハ、「エ」ンボム、體中

諸器ニ散生ス、例之ハ、膿熱症ニ於ケルカ如シ、此  
 「エ」ンボム、若、細血管ヲ盡、栓鎖シ、或ハ大脈ノ半ヲ  
 閉塞スレハ、其部ニ貧血ヲ發ス、若、動脈大幹ト、其  
 側枝トヲ共ニ閉鎖スレハ、其部壞疽ニ陥ル、夫體  
 中ノ器臟ニ、二系ノ血管ヲ具備スル者アリ、一ハ  
 營養ヲ給シ、一ハ官能ヲ營ム、例ハ、肺、肝ニ於テ、肺  
 動脈ト門脈トハ、官能ヲ營ム、氣管枝動脈ト、肝動  
 脈トハ、組織ヲ營養スルカ如シ、心モ亦之ニ齊ン  
 ク、脈管ノ二系ヲ具フ、乃、上下房ハ、其官能動脈ニ  
 適シ、冠動脈之カ營養動脈タリ、故ニ「エ」ンボムノ



如此キ器臟ニ生スルハ、其營養脈ヲ栓鎖スルト、官能脈ヲ閉塞スルトニ關涉シテ、必ス差異ナキヲ能ハス、若營養脈ヲ閉塞スレハ、其器死痺シテ、壞疽ニ陥リ、官能モ亦廢止ス、若官能脈ヲ栓鎖スレハ、之ニ反シテ、獨官能ノ廢絶スルノミ、營養機ヲ防碍スルヲナシ、例ハ、解屍檢査ニ方リテ、肺ノ動脈閉塞シテ、局部陷没スルヲ見ルト雖、營養動脈變化ナキニ由リテ、生前其徵症ヲ現發セザルカ如シ、總テ動脈ノ閉塞スルニ方リテ、其官能ヲ營ミ、其營養ヲ給スルヲ問ハス、側枝ノ血行速ニ

旺盛シテ、其缺乏ヲ輔償スレハ、其部ノ患害少時ニシテ、恢復シ得可シ、

徵候

其發症モ亦同シカラス、通常卒然ト發ス、例之ハ、腦ノ動脈大幹ニ「エンボリ」ヲ生シ、充血等ノ前徵ナクシテ、頭ニ卒中ヲ起スカ如シ、尋常溢血ノ為ニ發スル卒中ハ、之ト異ニシテ、預、顔面潮紅、頭顱血積等ノ諸徵ヲ發現スレハ、「エンボリ」ニ由リテ發スル者ハ、如此キ諸徵ナク、且「エンボリ」ヲ生シタル偏腦ト、其反對セル偏側ノ半身癱瘓シ、三日

原病學通論 卷之四 三十一

ヲ經テ後發熱充血等ノ諸症ヲ續發ス又肺動脈  
或ハ其大枝ニエンボリヲ生スレハ窒息ヲ以テ  
斃ル是血行閉止ノ為ニ肺ノ官能廢絶スルヲ以  
テナリ心ノ冠動脈エンボリニ由リテ栓鎖セラ  
ルレハ心力忽癱瘓ス眼球網膜ノ血管若ハ腦ノ  
四疊體ノ脈管エンボリヲ生シテ其血行ヲ妨碍  
スレハ眼球失明ス之ヲ誘起スルハ急性關節僵  
麻質私ニ由リテ心患ヲ併發シトロンボスヲ生  
シ破碎シテエンボリヲ形成スルニ在リ又膿熱  
症ニシテ視力ヲ失スルヲアリ亦同理ナリ四肢ノ

動脈エンボリニ罹ルルハ四肢劇痛ヲ發シ後知  
覺痴鈍シ身體厥冷シテ筋力癱瘓ス此症ノ確徵  
ハ脈管閉塞部ノ上ハ脈搏劇烈ナレト閉塞部ノ  
下ニ在リテハ少シモ之ヲ觸知スルヲ能ハス内  
臟ニ於テモ亦恐クハ然ラン其直ニ觸知スルヲ  
能ハサルヲ以テ的指ス可カラス尋常動脈大幹  
ヲ栓鎖スレハ壞疽ヲ發ス先指頭若ハ趾頭ヨリ  
起リ閉塞部ニ達ス而シテ多クハ經久ノ後ニ發  
ス或ハ速ニ發スル者アリ肝腎脾等ノエンボリ  
ハ多クハ徵候ヲ顯ハサス時アリテ輕微ノ症候

原病學通論 卷之四 三十一

ヲ發ス例之ハ、肝ニ在リテ、黃疸ヲ發シ、腎ニ於テ、  
 蛋白尿ヲ起スカ如シ、肝ニ生スルキハ、脾、腎、腸ノ  
 尿管モ亦之ヲ發ス、若シエンボリ、潰瘍ニ化セルト  
 ロンボスヨリ來ルキハ、他ノ器臟ニ到リテ、數多  
 ノ膿瘍ヲ生ス、其時必、惡寒戰慄シテ發熱ス、膿熱  
 症ニ於テ見ルカ如シ、エンボリニ由リテ、閉鎖セ  
 ル尿管ノ側枝、速ニ膨大發育シテ、血行自由ヲ得  
 レハ、器械ノ官能、暫時ニ恢復ス可シ、例之ハ、内頸  
 動脈ノ「エンボリ」ニ於テ、一時半身麻痺スト雖、脊  
 推動脈及他側ノ内頸動脈ニ由リテ、「ウァリス」氏環

ヲ通シテ、之ヲ補償シ、恢復スルカ如シ、腦ノ中央  
 動脈「エンボリ」ヲ發スレハ、側枝、容易ニ之ヲ補償  
 ス可キ者ナキヲ以テ、速ニ恢復スルヲ能ハス、或  
 ハ終ニ恢復セサルヲアリ、總テ腦中動脈ノ閉塞  
 ハ、大幹ニ在リテハ、細血管ニ於ケル者ニ比スレ  
 ハ、其症候輕易ナリトス、是大幹ノ閉塞ハ、側枝、容  
 易ニ之ヲ補償ス可シト雖、細脈ニ在リテハ、然ル  
 ヲ能ハサレハナリ、肺ノ小動脈ハ、「エンボリ」ヲ發  
 シテ、閉塞スルト雖、症候ヲ顯ハサス、是他ノ血管  
 之ヲ補償スレハナリ、然レモ、大幹、或ハ數多ノ細

動脈ヲ栓鎖スレハ呼吸困難及急性浮腫ヲ發ス  
 打診ニ於テハ異響ナシト雖聽診ニ由レハ心ノ  
 第二音胸ノ左側ニ於テ之ヲ聽ク強大ナリ而シ  
可シ是肺動脈ノ辨音ナリテ全身貧血ヲ併發ス是血液ノ容易ニ肺ヲ通過  
 スルヲ能ハスシテ右房ニ鬱積スルヲ以テナリ  
 此症皮膚及粘膜蒼白色ヲ呈シ四肢厥冷シ腦延  
 髓ノ貧血ニ由リテ斃ル解屍検査ニ於テ心ノ右  
 房及大靜脈ニ血液鬱積スルヲ見ル腸間膜動脈  
 ニエンボムヲ生スルハ腸血疝痛鼓脹腹水等  
 ヲ發シ且之ニ先タチテ憎寒戰慄ヲ起スヲ常ト

ス、

原病學通論卷之四畢

原病學通論卷之五

目次

血行違常ニ起因セル諸疾中

出血

水腫

炎上

原病學通論卷之五目次畢

原病學通論卷之五

和蘭教師 亞爾幾聯斯 講述

松江 熊谷直温

東京 安藤正胤 筆記

膳所 村治重厚

血行違常ニ起因セル諸疾中

出血

血液ノ成分盡、尿管外ニ溢出スルヲ出血ト稱ス、  
尿管系統ノ諸部皆之ヲ發ス可シ、乃、心臟、動脈、靜  
脈、及、鬚細管、各自ニ之ヲ發スルヲアリ、特ニ心臟

出血ハ、心臟破裂シ、心嚢内ニ血液ヲ溢出ス、故ニ之ヲ區別シテ、心臟出血、動脈出血、静脈出血、髮細管出血トス、又、組織出血ト稱スル者アリ、是、組織中ノ細脈及、髮細管ヨリ、一時ニ出血スルヲ謂フ、例ハ、陰莖海綿組織内ノ出血ノ如シ、然ルルハ、海綿體中ノ細血管ヨリ盡ク出血シテ、其細胞ヲ充填ス、其他骨髓中出血、富脈腫瘍中出血等モ亦此例ナリ、夫、赤血球多量ニ脈管外ニ出ルハ、必、脈管ノ破裂ニ由ラサルナシ、然レモ、少量ナルハ、惟、髮細管ヨリ溢出スルナリ、是、蓋、赤血球、延長シ

テ、管壁ノ細孔ヲ穿通シ出ツル、恰、白血球ノ如クナラン、又一説ニ、血壓増加ノ為、ニ髮細管壁、少シク破裂シテ、細孔ヲ開キ、赤血球此ヨリ外出シテ、直ニ其孔ノ開鎖スルナラント、未、何カ是ナルヲ知ラスト、雖、赤血球ノ脈外ニ出ツル、多量ナルハ、必、脈管破裂ニ由リ、少量ナルハ、脈管破裂セサルナリ、モ蓋、亦之、アラシ、出血ヲ區別シテ、二トス、曰ク、體外出血曰ク、體內出血是ナリ、甲ハ血液ノ肌表或ハ粘膜炎ニ溢出スルヲ謂フ、例之ハ、皮膚、鼻腔、子宮、膻、及、直腸ノ出血ノ如シ、之ニ反シテ、出

血スルモ、血液ヲ見ザル者ヲ乙種トス、其腔洞内ニ在ル<sub>1</sub>アリ、胸膜腔、腹膜腔、膀胱、及心囊内ノ出血ノ如シ、或ハ管中ニ在ル<sub>1</sub>アリ、輸尿管、腸、氣管、枝、膽管ノ出血ノ如シ、或ハ組織中ニ出血スル<sub>1</sub>アリ、腦、脾、肺、及皮下組織中ニ在ルカ如シ、凡テ出血ハ、其血液ノ動脈性、靜脈性ナルヲ問ハス、純粹ナル<sub>1</sub>アリ、或ハ多少他液、即、粘液、或ハ膿汁ヲ混スル<sub>1</sub>アリ、例、ハ、肺炎ノ出血ハ、粘液ヲ雜フルカ如シ、又、分泌液、或ハ排泄物ヲ雜フル<sub>1</sub>アリ、例、ハ、尿、屎、汗、淚等ヲ混スルカ如シ、

出血ハ、其狀態ニ關涉シテ、各個ニ名ヲ異ニス、第一、血液、少量ニ溢出シテ、廣大部ニ散布スル者、之

ヲ膜下溢血ツフヒト稱ス、第二、出血小點ヲナス

者、之ヲ血斑ヒキモト稱ス、例、ハ、蚤痕ノ如シ、第二、

出血組織ヲ分界セルモ、之ヲ破潰ヒサル者、之ヲ

ブル<sub>1</sub>ジー<sub>1</sub>イン<sub>1</sub>ヲラクト血液ノ組織中ニ溢出シテ之ヲ分界シ、其裂隙ヲ充填

スルノ義ト稱ス、例之ハ、子宮、肺等ニ於ケルカ如シ、

第四、出血、管ニ組織ヲ分界セルノミナラス、之

ヲ破潰スル者、之ヲ卒中アホブレト稱ス、例、ハ、肺、

肝、脾等ニ於ルカ如シ、或人ハ、特ニ此名ヲ腦出血



ノミニ用ヒタリ、是腦出血ハ、必組織ヲ頽廢シテ、  
 分界ニ止マラサレハナリ、又出血セル器械ニ關  
 シテ、特異ノ名稱ヲ用ヒ、肺ノ出血ヲ**咯血**トシ、  
 ト云ヒ、胃ノ出血ヲ**吐血**トシ、ト云フ、出血ノ尿  
 ニ雜ハル者ヲ**尿血**ト云ヒ、肛門ヨリスル  
 者ヲ**痔血**ト稱シ、鼻腔ヨリスル者ヲ**衄血**  
ト稱スト稱ス、其溢出ノ量大ニ差等アリ、大血脉  
 ニ於テハ、多量ニシテ、命ヲ失フニ足り、或ハ少量  
 ニシテ、蚤痕ノ如ク半滴ニ充タサル者アリ、  
**原因**、之ヲ今チテ四種トス、**第一**、脉外ニ在ル者

ニシテ、創傷挫傷、碎骨片、脉壁ヲ穿ツ斷骨由リテ、出血ヲ將來ス等ニ  
 由リテ、出血ヲ起シ、又粘膜ノ剥脱ニ由ル例之ハ、  
 尿石、或ハカテートルノ摩擦ニ由リテ、尿道粘膜  
 ヲ剥脱シ、或ハ硬糞ノ為ニ、直腸粘膜ヲ剥脱シ、  
 出血スルカ如シ、又寄生動物ニ由ルアリ、例之  
 ハ、エンキロストマム、ジオテリム前条既ニ於  
 詳説アリニ於  
 ルカ如シ、又組織ノ緊張ニ由ル例之ハ、分娩ノ為  
 ニ、會陰破裂シ、或ハ硬糞ニ由リテ、肛門破裂シ、組  
 織中ノ脉管モ亦共ニ破裂シテ、出血ヲ起スカ如  
 シ、又膿瘍或ハ潰瘍ノ脉管ヲ穿通スルニ由ル、又

外科學通論 卷之五 三

筋ノ收縮過劇ナルニ由ル例之ハ咳嗽ニ由リ或ハ便秘尿道狹窄ノ為ニ甚シク努力スルニ由リテ肺腦等ニ出血ヲ發スルカ如シ其他氣壓ノ減却ニ由ル例之ハ高山ニ登リ或ハ吸角ヲ貼スル片ノ如シ**第二**脉壁組織ノ變質シテ脉壁ノ抵抗減衰スルニ基因ス例之ハ心筋肉炎後ニ心臟破裂シ或ハアテロロノ為ニ尿管破裂スルカ如シ又新生脉ハ管壁菲薄ニシテ抗抵劣弱ナルヲ以テ出血シ易シ例之ハ創痕肉芽ノ出血シ易キカ如シ**第三**實性及虛性充血ノ為ニ血液ノ壓勢増

加スルニ由ル例之ハ頭顱ニ充血ヲ起シテ衄血ヲ發シ或ハ心臟僧帽瓣ノ閉鎖全カラサルカ為ニ咯血ヲ將來スルカ如シ其他健態ニ在リテ整然定期ヲ以テ發ス可キ出血ノ閉止例之ハ月經血閉止ノ咯血吐血衄血或ハトロンボシス「**二**」腦出血ヲ將來スルカ如シ「**三**」ホム或ハ刺衝性藥劑ノ誤用例之ハ荒菁或ハ過多ニ服用セルニ由リ尿管充テカシテ特ニ荒菁ハ輕量ニ服スルハ尿管充テカシテ特ニ動セシムト云フ等亦出血ヲ起ス「**四**」皆此例ナリ**第四**血液尿管共ニ變質セルニ由ル例之ハ「**五**」スコル症所謂矢苟出血家ノ出血或ハ泰衰度ノ

初起ニ於ル出血ノ如シ、此血液ハ久シク時ヲ經ルモ、凝結セス、以テ血液ノ變調ヲ徵知ス可シ、其  
他痘瘡、麻疹、猩紅熱、及鑛屬酸中毒ニ於ルモ亦然  
リトス、

出血ヲ助ケ發スルハ、多クハ脉壁ノ患害ト、實性  
ノ充血トニ由ル、又某組織ノ、特ニ出血シ易キ素  
因ヲ有セル者アリ、乃脾臟、皮下組織ノ如ク組織  
太緩鬆ナル者、或ハ組織中、血管ヲ富有セル腦ノ  
淡黑髓、及肺ノ如キ者是ナリ、卒中ニ於テ、淡黑髓  
中一出血スル者多キハ、其血管ニ富メルヲ、白髓

ニ優レハナリ、  
出血ノ閉止ハ、種々ノ方法ヲ以テス、**甲**大抵纖維素  
ノ凝結ニ由リテ、自ラ閉止ス、脉管創傷ニ方リテ、  
トロンボシヨ生シ、終ニ結締織ヲ化生スルヲ、既  
ニ述フルカ如シ、**乙**創傷ニ於テハ、脉管組織中ニ  
短縮シテ止血ス、**丙**脉管ノ筋層、收斂シテ縮小ス  
ルニ由ル、收斂止血藥ノ奏効アルハ、此理ニ基ツ  
ケリ、麥奴、醋酸類ヲ服スルホノ如シ**丁**近傍組織  
ノ收縮ニ由ル、例之ハ、分娩後ノ出血、子宮ノ收縮  
ニ由リテ、閉止スルカ如シ、今、分娩後ニ、手ヲ以テ、小  
腹ヲ輕々採按シテ、收

縮ヲ促セハ、出血速ニ閉止ス。〔戊〕血液壓勢ノ減スルニ由ル、是多量亡血ノ後、全身脫力シテ、心ノ收縮力大ニ減衰スルヲ以テナリ、然ルモハ、卒倒シテ出血自ラ閉止ス。〔巳〕多量亡血ノ後、血液稀薄水様ト為リ、纖維素ノ容易ニ凝固ス可キ性ヲ得ルニ由ル、然レモ、健康血液ノ如ク、凝固ノ凝塊ヲナスヲ能ハス。出血ヲ持續セシムル原由種々アリ。〔其一〕筋ノ收縮ニ由ル、例之ハ、刺絡ノ間ニ筋力ヲ用ヒレハ、深キ静脈ヲ壓迫シテ、淺キ静脈ノ出血旺盛スルカ如シ。〔其二〕身體ノ運動ニ由ル、故ニ亡血後ハ、患者

ノ安静平臥ヲ要ス、否ラサレハ、心ノ機能ト共ニ、脈管モ亦興奮スレハナリ、婦人兮、分娩後ニ於テモ亦然リ。〔其三〕創傷ニ方リテ、血管ノ一部ヲ傷シ、全ク截斷セサルニ由ル、然ルモハ、脈管啻ニ組織中ニ短縮スルヲ能ハサルノミナラス、却テ其收縮創孔ノ兩端ヲ牽引シ、之ヲ開大シテ、出血ヲ増進ス。

體內出血ノ變化

第一 溢出ノ血液、吸收セラル、其澄液、先、血管水脈中ニ吸收セラレ、他ノ固形分ハ、脂肪變性ヲ受テ、

細分子ニ化シテ後、吸收セララル、然レモ、色素ハ、持  
ニ粒狀ヲナシ、或ハ結晶シテ、残留スルヲ常トス、  
第二澄液ノミ、吸收セラレ、他成分ハ、帶黃白色ノ  
粒狀塊ニ化シテ、久シク局處ニ沈著ス、之ヲ乾酪  
變性物ト稱ス、其形狀、乾酪ニ類似セ、然ル片ハ、近  
傍組織ヲ刺戟シテ、炎ヲ發ス、肺、脾、種々ノ癌腫等  
ニ於テ、看ルカ如シ、

第三液分ノミ、吸收セラレ、固形分残留シテ、石灰  
樣ノ硬塊ニ變ス、

第四固形分腐敗ス、是溢血ニ分泌物及排泄物液

膿汁、ヲ雜ヘ、或ハ其大氣ニ暴露スルニ由ル者ニ  
尿、屎、ヲ雜ヘ、或ハ其大氣ニ暴露スルニ由ル者ニ  
シテ、腐敗膿熱セヲ起ス、

第五、溢出セル血液、變シテ有機性諸物ニ化ス、**甲**  
ハ結締織ニ變ス、例之ハ、筋、結締織、腦、肝等ノ内部  
ニ出血スル中ノ如シ、其時ハ、出血ノ窘迫ニ由リ  
テ、組織類廢シ、結締織之ニ代リテ、其部ニ癰痕ヲ  
遺ス、乃、腦ノ卒中癰痕ノ、結締織ヨリ成レルカ如  
シ、**乙**ハ骨組織ニ化ス、例之ハ、斷骨ノ兩片間ニ溢  
出セル血液ハ、骨質ニ化シテ、斷骨ヲ連續スルカ  
如シ、又頭蓋骨ノ裡面ニ出血スレハ、新骨片ヲ化

生シ、舊骨片ニ癒合シテ、其部ヲ肥厚セシム、(丙)ハ  
 囊腫ニ變ス、是、周圍ノ血液ハ、結締織囊ヲ化生シ、  
 中心ノ血液ハ、含蓄液トナルカ故ニ、初メハ赤色  
 ナルモ、後ニハ稀薄澄液様ノ液ニ變ス、  
 總テ組織内ノ溢血ハ、近傍ノ脉管ヲ壓迫シテ貧  
 血ヲ發シ、次テ反應ヲ起ス、其溢血、恰異體ノ如ク  
 其部ヲ刺戟スルヲ以テ、組織ニ充血ヲ發シ、轉シ  
 テ炎ヲ起シ、終ニ膿腫ス、是、腦出血ニ於テ、多ク見  
 ル所ニシテ、卒中後二三日ヲ經テ、大熱ヲ發スル  
 ハ、之カ為ナリ、或ハ、甚シキ貧血ヲ起シ、壞疽ニ陷

ルヲアリ、又溢血ノ刺戟持續スルハ、周圍ニ結  
 締織ヲ新生シテ、之ヲ肥大セシメ、遂ニ隣接ノ健  
 部ト全ク分界ス、若、骨組織中ニ在ルハ、骨組織  
 肥大ヲ發ス、或ハ之ニ反シテ、組織ノ萎縮スルヲ  
 アリ、  
 腔洞内出血ハ、盡、吸收セサルヲアリ、例之ハ、胸腔  
 内出血ノ如シ、或ハ其部ニ、唯、些少ノ色素ヲ貯ス  
 ヲアリ、或ハ發炎化膿スルヲアリ、又或ハ結締織  
 ニ化シテ、全腔ヲ充填スルヲアリ、若、胸腔内ニ之  
 ヲ發スルハ、肺全ク胸壁ニ癒著スルニ至ル、

原病學通論 卷之五  
粘膜出血ハ常ニ必其部ニ血液ヲ見ル者ニ非ス、  
例之ハ胃ノ出血ハ其蠕動機ノ為ニ輸送セラレ  
テ腸中ニ其血液ヲ存シ或ハ一肺ノ出血他肺ニ  
往キ或ハ胃ニ到ルアルカ如シ故ニ死後粘膜  
出血ノ部位ヲ確定スルニ甚難ク其通路探知ス  
可カラサルヲ多シ乃チ蒸度熱ニ於ル腸粘膜ノ  
出血勞瘵或ハ充血ヨリ發スル肺粘膜ノ出血等  
ノ如シ肺ノ出血ハ屢勞瘵ヲ誘起スルヲ以テ太  
危篤ナリ此其血液氣胞ヲ充填シテ乾酪變性ヲ  
起シ近傍組織ニ炎ヲ發スレハナリ、



症候

第一、外部出血ハ血液直ニ肌表或ハ其孔竅ヨリ  
流出スルヲ以テ容易ニ識別ス可シ乃チ咳嗽嘔吐  
ニ由リテ鼻口ヨリシ或ハ尿尿ニ混シテ尿道肛  
門ヨリシ又或ハ子宮ノ收縮ニ由リテ膻ヨリ出  
血スルカ如シ溢出セル血液ハ其動脈血ナリヤ  
將靜脈血ナリヤ區別スルニ常ニ容易ナラス、  
若動脈血ナルハ結紮ヲ要スルヲ以テ外科ニ  
於テ持ニ緊要ナリ故ニ先血液ノ色澤ヲ以テ區  
別スルニ鮮紅ナル者ハ動脈血ニシテ闇赤ナル

者ハ、静脈血ナリ、然レモ、唯、色澤ノミヲ以テ常ニ  
 確定ス可キニ非ス、何トナレハ、呼吸嚙吸入後  
 ハ、動脈血モ亦静脈血ノ如ク暗色ヲ帶フルヲア  
 リ、又動静二脈ノ血液相混淆スル片ハ、亦色澤ヲ  
 以テ判別ス可カラサルヲ以テナリ、若、創傷深キ  
 片ハ、假令血液ノ色ヲ檢セサルモ、動脈モ亦傷ヲ  
 蒙ル<sub>レ</sub>必セリ、動脈ヲ全断スレハ、直ニ組織中ニ  
 收縮シテ、假ニ出血セサルモ、暫時  
ノ後、必、出血又、脈管ノ截痕ヲ看得ル片ハ、脈壁ノ  
スル者ナリ、以テ分ツ可シ、厚キハ動脈ニシテ、薄キハ  
 静脈トス、又血液流出ノ度ニ由リテ、分別ス可シ、

動脈血ハ、迸出スレモ、静脈血ハ、緩流ス、又迸出ノ  
 持續ト、間歇トニ注意ス可シ、持續セルハ、細動脈  
 出血ニシテ、間歇セルハ、巨動脈出血ナリ、是、搏動  
 ノ強弱ニ關與セル所ナリ、然レモ、静脈出血モ亦  
 間歇スルヲアリ、例ハ、頸静脈ノ出血ハ、呼氣ノ時  
 ニ血壓増加スルヲ以テ、迸射ノ勢盛ナルモ、吸氣  
 ニ於テハ、血壓減却シテ、外氣ヲ竄入セシムルカ  
 如シ、又動脈ニ直接セル静脈ハ、動脈ノ搏動ヲ受  
 ケテ、其出血ノ間歇スル<sub>レ</sub>、動脈ニ齊シ、故ニ血液  
 迸射ノ景況ノミヲ以テ、動脈血ト、静脈血トヲ確



定スルヲ能ハス又創孔ノ上下ヲ壓シ試ミテ區別ス可シ動脈出血ハ上部ノ壓迫ニ由リテ歇止ス可ク靜脈出血ハ之ニ反シテ上部ノ壓迫其還流ヲ妨碍シテ血液ノ流出ヲ増ス其他溢出セル血液ノ量ヲ以テ區別ス動脈出血ハ靜脈出血ニ比ヒハ其量必多シトス是創孔ヲ看ルヲ能ハサリ片ニ然リ例ハ鼻腔出血ニ於ルカ如シ

第二、内部出血、表面部ノ出血ハ少量ナレハ皮下ニ藍色斑ヲ現ハシ多量ナレハ腫脹ス粘膜下出血モ亦然リ總テ皮下及粘膜下ノ出血ハ共ニ其量

少ナキヲ常トス是溢出血ノ血液、脈管ノ創孔ヲ壓搾スレハナリ出血若腔洞内ニ發スルキハ其腔洞ヲ擴大ス例之ハ分娩後ノ出血ニ由リ子宮擴張シテ臍部ニ達スルカ如シ膀胱胃等モ亦然ルアリ若管内ニ出血スルキハ血液凝固シテ之ヲ閉塞ス例ハ尿道狹窄ヲ截開セル後或ハ膀胱出血ノ為ニ尿道閉塞シ又咯血ノ多量ナルニ由リテ氣喉ヲ閉塞スルカ如シ深部ノ出血ハ種々ノ徵候ヲ現發ス然レモ若少量ナレハ症狀ヲ顯ハサ、ルヲアリ例之ハ脾臟出血ノ如シ是脾ハ

其組織甚々緩鬆ナルヲ以テ、溢血ノ壓迫ニ由リテ、容易ニ轉移スレハナリ、然レモ、或ハ危險ノ症候ヲ發スルヲアリ、例之ハ、腦脊髓出血ノ如シ、是其組織移動スルヲ能ハスシテ、血液ノ壓迫ノ為ニ、潰亂スレハナリ、故ニ器臟ノ異同ニ隨ヒテ、症候ニ難易アリトス、劇烈ノ出血ハ、體中ノ血液大抵脈外ニ溢出シテ斃死ス大人ハ、凡五ポントヲ以テ死シ、小兒ハ、僅ニ二三「オン」ニシテ死ニ至ル、如此キ出血ハ、假令血液ヲ見ルヲ能ハサルモ、其症候確然タリ、皮膚粘膜、共ニ灰白色ヲ呈シ、鼻

梁尖銳トナリ、鼓音嘶啞シ、脈至細數トナリ、嘔吐ヲ發シ、盜汗流漓シテ、昏矇眩暈ヲ發シ、振惕卒倒シテ、遂ニ輕キ搖擗ヲ以テ死ス、右ノ諸症暫時間ニ續發スルハ、内部大出血ノ確兆ナリ、又少量ノ出血、頻々反復シテ、久シク持續スルハ、血液漸次ニ稀薄トナリテ、水腫ヲ起ス、例ハ、（西）「（西）」（西）ニ於ルカ如シ、又出血ノ却テ幸福トナル（西）「（西）」（西）アリ、例ハ、腦ノ實性充血ニテ、衄血ヲ發シ、或ハ門脈虛性充血ニテ、痔血ヲ起スカ如シ、

水腫

水腫ハ血中ノ液分、身體諸部ニ滲漏シテ蓄積セ  
 ルヲ謂フ、其組織中ニ鬱滯セル者ヲ**浮腫**ト稱ス、  
 稱シ、腔洞内ニ瀦溜セル者ヲ**水腫**ト稱ス、  
 又其腔洞ノ殊ナルニ隨ヒテ、各其名ヲ異ニス、胸  
 腔ニ在ル者ヲ**胸水**ト云ヒ、心囊ニ在ル  
 者ヲ**心囊水腫**ト云ヒ、腦ニ在ル者ヲ  
**腦水腫**ト云フ、腦水腫ハ分チテ内外ト  
 ス、其腦室ニ在ル者ヲ**腦内水腫**ト云ヒ、腦膜間隙  
 ニ在ル者ヲ**腦外水腫**ト云フ、罩丸莖膜ニ在ル者  
 ハ、**陰囊水腫**ト稱シ、腹膜腔ニ在ル者ハ、

**腹水**ト稱シ、關節腔ニ在ル者ハ、**關節水腫**  
 ト稱ス、是皆水腫ニ罹リ易キ部位ナ  
 リ、

水腫ハ、局處、汎發ノ兩種アリ、一時ニ身體諸部ニ  
 發スル者ヲ**汎發水腫**トス、其滲液ノ成分ハ、百分  
 中、水分九十五分ヲ占メ、中ニ蛋白樣質、脂肪質、  
 レステアリンノ結晶、尿素、血中鹽類ヲ溶孕シ、又  
 纖素元ヲ含ムトアリ、此纖素元ハ、少量ノ血液ヲ  
 雜フルニ由リ、纖素ニ化シテ凝結ス、水腫ノ液ニ  
 二三滴ノ血液ヲ加ヘテ、盡、凝固スルハ、之カ為、十

リ、持ニ陰囊水腫ノ液ニ於テ、然ルヲ多シ、其他、顯  
微鏡的検査ニ由リテ、常ニ多少ノ白血球ヲ見ル、  
又多クハ、内皮セルヲ含ミ、尿管破裂ノ時ニ在リ  
テハ、赤血球ヲ混セルヲ見ル、

原因之ヲ區別シテ、二トス、一ハ、血脉及水脈循環  
ノ違常ニ因ス、之ヲ器械的水腫ト云ヒ、一ハ、血液  
調和ノ變化ニ基ツク、之ヲ悪液性水腫ト云フ、  
第一、器械的水腫ハ、又之ヲ數種ニ分ツ、**甲**ハ虚性  
充血ニ由ル、乃之カ為ニ血壓増加シテ、血中ノ澄  
液、髮細管ヨリ滲出ス、例ハ、下行大静脈ノ閉塞ニ

由リテ、下肢浮腫ヲ發シ、時アリテ、腹部ニ波及シ、  
或ハ胎兒分娩ノ際、骨盤輪、或ハ子宮口ノ見頭ヲ  
壓迫スルニ由リテ、其頭浮腫シ、或ハ肝臟縮小硬  
變シ、門脉閉塞スルニ由リテ、腹水ヲ起シ、或ハ輸  
精管及睪丸ノ静脈、擴張シテ、陰囊水腫ヲ將來ス  
ルカ如シ、又心臟病ノ為ニ、虚性充血ヲ起シテ、汎  
發水腫ヲ發スルモ、亦其理同一ニシテ、持ニ僧帽  
瓣ノ不全閉鎖、若ハ其房間孔、狭窄スル片ハ、皮膚  
ノ浮腫、或ハ内部ノ水腫ヲ發ス、**乙**ハ實性充血ニ  
由ル、乃、急性炎ニテ、炎部ノ周圍ニ浮腫ヲ發スル

是ナリ例之ハ、顔面羅斯ニテ、其周圍ニ浮腫ヲ起シ、下疳ニテ、陰莖前皮發炎シテ、浮腫スルカ如シ、又口内化膿ノ為、ニ、實性充血ヲ起シテ、頰部浮腫シ、氣喉加答兒、或ハ潰瘍ノ為、ニ、氣喉口浮腫スル等、皆其例ナリ、**丙**ハ水脈ノ閉塞ニ因ス、汎發水腫ニテ、死セル屍體ヲ剖驗シテ、胸管閉塞ヲ看ルルアリ、是水脈ノ循環不全ニシテ、血管ヨリ滲泄セル水分ヲ盡、吸收スルヲ能ハサルヲ以テナリ、  
 第二、惡液性水腫、夫、血中ノ蛋白質、其量ヲ減スレハ、血中ノ水分、必、增加シテ、水腫ヲ誘發ス、試ニ水

ヲ動物ノ靜脈ニ注入セバ、血中ノ水分、增量シテ、忽、水腫ヲ起サン、然レ、其動物ノ腎臟、健康ナレハ、尿ノ分泌旺盛シテ、水分ヲ驅逐スルヲ以テ、水腫速ニ消散ス、惡液性水腫ハ、大抵器械的ノ原由ヲ兼ヌ、是、血液ノ變調、必、心ノ收縮力ヲ減殺シテ、虛性充血ヲ起セハナリ、例ハ、重病ノ恢復期ニ方リテ、足跡、眼瞼、顔面等ニ浮腫ヲ發シ、如此キハ、スレハ、下肢浮腫ヲ發シ、偏臥ス、久シク佇立種々ノ水腫ヲ起シ、又皮膚、骨、粘膜等ノ、暫留釀膿ニテ、血液變調シテ、貧血ヲ將來シ、為、ニ、水腫ヲ誘

起シテ遂ニ命ヲ失フカ如シ、惡液性水腫ハ多クハ蛋白尿ヲ合併ス、是血中蛋白質ノ尿ト共ニ漏泄スルニ由リテ血液變調スレハナリ、然レモ未<sub>タ</sub>其理ヲ詳悉スル<sub>レ</sub>能ハス、一說ニ血中蛋白質其性ヲ變シテ容易ニ脉壁ヲ透徹ス可キ景況トナルニ由ルト、又一說ニ腎ノ髮細管壁變性シテ容易ニ蛋白質ヲ透徹スルニ由ルト、未<sub>タ</sub>孰<sub>ク</sub>レカ是ナルヲ知ラスト雖<sub>モ</sub>如此キ水腫ハ血中蛋白質ノ失却ニ因スル<sub>レ</sub>必セリ、故ニ蛋白尿ノ患者ニシテ水腫ヲ併發ヒサルハ極メテ稀ナリ、又種々<sub>ノ</sub>カ

アル<sub>レ</sub>凶性ノ疾病ハ血液ヲ稀薄ナラシメテ水腫ヲ誘起ス、許多ノ水腫中或ハ其因ノ辨知シ難キ者アリ、例ハ慢性皮膚病ノ俄頃ニ癒エテ皮膚浮腫ヲ發シ、老婦ノ月經閉止後ニ下肢浮腫スルカ如シ、  
水腫ハ大抵惡液性ト器械的トノ二因ヲ併有ス、例ハ心臟疾患ニ由リテ血液循環不全<sub>的</sub>器械<sub>的</sub>ナル片ハ諸部ノ營養不給ニシテ新鮮ノ血液ヲ製造スル<sub>レ</sub>能ハス、為ニ血液變調シテ<sub>性</sub>惡液<sub>性</sub>水腫ヲ誘起スルカ如シ、又肝臟硬變症ハ血行ヲ妨碍シ<sub>械</sub>器<sub>的</sub>

原病學通論 卷之五 十一 三

的營養機能ヲ障害スルヲ以テ、血液變調シテ、水腫ヲ繼發スルカ如シ、又神經ノ變常殊ニ交感神經ノ麻痺ニ由リテ、水腫ヲ發スルアリ、例ハ、第七對神經ノ麻痺ニ由リテ、顔面ニ浮腫ヲ發スルカ如シ、

症候浮腫ハ、其部灰白色ヲ呈シ、腫脹シテ、常ニ比スレハ、柔軟ナリ、若指頭ニテ壓スレハ、著シク凹陷シテ起ラス、皮膚緊張シテ、皺襞ヲ失ヒ變シテ透明トナリ、溫度減少ス、粘膜ニ於テモ亦然リトス、○汎發浮腫ハ、常ニ下肢、生殖器、腰腕等ニ於テ

最劇甚ナリ、極度ニ達スルハ、壓迫ノ為ニ、皮下ノ脂肪組織消耗シ、皮膚組織緊張シテ、點々破裂シ、癒後癍痕ヲ遺ス、一、恰婦人兮、娩後ノ癍痕ニ異ナラハ、下肢、腹壁等ニ於テ之ヲ見ル、其裂隙ヨリ、液ヲ漏泄シテ、炎ヲ發シ、ゴースト樣トナリテ、遂ニ壞疽狀ニ轉スルアリ、殊ニ生殖器ニ多シトス、例ハ、陰囊水腫ニテ、腹股合縫部ノ皮膚、互ニ摩擦シ、表皮剝脫シテ、ゴーストトナリ、常ニ水樣ノ液ヲ漏泄スルカ如シ、如此キ患者ハ、常ニ自ラ腫部ノ緊張偏重ヲ覺ヘ、筋力癱瘓シ、皮膚粘膜ノ分泌

減少シテ乾燥シ、泌尿清澄ニシテ清水ノ如ク、極  
ノテ少量ナリ、而シテ多分ハ、下利ヲ繼發ス、○内  
臟ノ浮腫ハ、其器臟ノ異同ニ關涉ンテ、特異ノ症  
候ヲ顯ハス、通常器械ノ周圍擁塞スルヲ以テ、擴  
張スルヲ甚シカラス、然レモ、大ニ官能ヲ妨害ス、  
例ハ、腦質浮腫ハ、劇シキ人事不省ニ陥リ、肺ノ浮  
腫ハ、索齧不全ニシテ、氣體ノ交換自在ナラス、遂  
ニ炭酸中毒ヲ以テ、斃ル、カ如シ、○腔洞ノ水腫  
ハ、腔洞ヲ擴張ス、例ハ、陰囊水腫シテ、大ニ擴張シ、  
陰莖ノ前皮ヲ牽引奪領シテ、陰莖殆、看ル可カラ

ス、或ハ腹水ノ、腹部非常ニ膨脹シ、或ハ嬰兒ノ腦  
水腫ニテ、頭顱增大スルヲ、常ニ三倍シ、頭蓋ノ骨  
板至薄紙狀トナルカ如シ、是、小兒ニ在リテハ、頭  
蓋ノ諸骨、未、全ク化骨  
セサルヲ以テ、然リト雖、成人之ニ  
罹レハ、腦ノ壓迫ニ由リテ死ス而シテ水腫ノ  
度ト、其腔洞トニ關與シテ、其發症一ナラス、總テ  
之ヲ打テハ波動ヲ起シ、打診ニ由リテ濁音ヲ聽  
ク、此音ノ所在ハ、患者ノ位置ニヨリテ異ナリ、例  
之ハ、胸水及腹水ノ患者、坐スルキハ、濁音ヲ橫徑  
ニ聽キ、臥セハ、縱徑ニ聽クカ如シ、若洞中ニ空氣  
ヲ雜フレハ、患者ノ體ヲ振蕩シテ、水ノ空氣ト相

原病學通論 卷之五 十九 三 散 論



搏チテ發セル一種ノ音ヲ聽ク胸水ニ於テ然ル  
アリ又器械ノ容易ニ動搖ス可キ者ハ水液ノ  
壓迫ニ由リテ其位置ヲ轉易ス例ハ腹水横膈膜  
ヲ壓上シテ胸廓ヲ狹隘ナラシメ呼吸短促シ心  
肝モ亦共ニ壓上セラレ余嘗テ一患者ノ心動ヲ  
鎖骨下ニ於テ聽キシ  
リ或ハ胸腔左側ノ水腫心ヲ壓迫シテ右方ニ轉  
位スルカ如シ又器械ヲ壓迫シテ其官能ヲ障害  
スルアリ例ハ心嚢水腫ノ壓シテ心ノ筋肉ヲ  
癱瘓セシムルカ如シ  
滲出セル液ハ漸次ニ增量シテ其壓力動脈ノ血

壓ト平均スルニ至リテ止ム例ハ腹水ノ増加ス  
ル片其壓力内臟動脈ノ血壓ト平均スルニ至ル  
カ如シ而シテ原由除カサレハ其景况久シク持  
續ス例之ハ陰嚢水腫ノ一景况ニテ久シク暫留  
スルカ如シ然レモ其原由去ル片ハ消散スル  
論ヲ俟タス例ハ急性炎ノ為ニ發セル急性浮腫  
ハ炎ノ消散ニ隨ヒテ速ニ治スルカ如シ水腫ヲ  
治スルニハ其腔洞ヲ充塞ス可シ例ハ陰嚢水腫  
ノ其液ヲ漏排シテ沃顛丁幾ヲ注入シ罩丸炎膜  
ノ層間ニ炎ヲ發シテ癒著セシメ或ハ其登膜ノ

一部ヲ截去シ、或ハ撒糸ヲ挿入シテ、發炎セシメ、遂ニ治スルカ如シ、然レモ、多分ハ姑息ノ療法ヲ以テ、一時水液ヲ排泄スルノ他、良策ナシ、例之ハ、腹水ハ、肝ノ萎縮ニ由リテ、之ヲ根治スルヲ能ハス、下ロイカルヲ用ヒテ、其液ヲ漏スカ如シ、水腫ニ由リテ死スル者ハ、通常久時、之ヲ患ヒテ、身體衰憊スルニ在リ、例ハ、胸水、腹水ニ於ルカ如シ、或ハ浮腫ノ為ニ、卒爾ニ死スルヲアリ、例ハ、腦肺聲帶隙等ノ急性浮腫ニ於ルカ如シ、

炎上

夫、炎ハ、醫ノ、日常實驗シテ、容易ニ診定ス可キ者ナレモ、其機轉甚、錯雜シテ、瞭然之ヲ詳識スルヲ能ハス、一個ノ器臟若、ハ、一部ノ組織ニ於テ、血液灌溉ヲ起シ、脈管ヨリ、澄液ヲ滲泄シ、組織内ニ膿球ヲ釀生シテ、多少組織ヲ頽敗シ、次テ同種、或ハ異性ノ組織ヲ新生シテ、頽敗セル組織ヲ補償ス、如此キ景況ヲ目シテ、器臟、或ハ組織ノ炎トシ、炎ハ、局部ニ赤色ヲ呈シ、焮熱、腫脹、疼痛等ヲ發シ、多少官能ヲ障碍ス、多クハ、急性ナレトモ、或ハ慢性ナルヲアリ、而シテ、單ニ一箇ノ組織ヲ侵スルヲ

リ例ハ、結締織、澄膜、骨膜、骨組織ノ如シ、或ハ一器ヲ襲ヒテ、盡全體ヲ傷害スルコトアリ、例ハ、心臓炎、唾腺炎ノ如シ、或ハ器臟ノ局處ヲ侵スコトアリ、例ハ、肺炎ノ唯、一葉ノミニ在ルカ如シ、或ハ數種ノ組織ヨリ、構成セル器臟ニ於テ、特ニ其一組織ヲ侵スコトアリ、例ハ、腎臓炎ニ於テ、特ニ細尿管ヲ襲ヒ、粘膜炎ニ於テ、唯、粘液腺ノミヲ侵シ、肝、肺ノ炎ニ於テ、唯、結締織ノミ、發炎スルカ如シ、或ハ雙對器ニ於テ、其一ヲ襲フコトアリ、或ハ雙器共ニ患フコトアリ、例ハ、胸膜、肺臟ニ於テ、其偏側ノミ、發炎

シ、腦半規形、眼球、腎臟ノ左右共ニ患フルカ如シ、  
**原因** 總テ、炎ハ、刺衝物ノ局部ヲ刺戟スルヨリ起ル者ナリ、乃、諸外傷、創傷、挫傷、挫異體、少塵、木屑、丸腺内、留ノ分泌液、炎ノ産物、膿、球、劇烈ノ寒熱、化學的諸品、持異ノ毒物、淋疾ノ粘液、梅毒、膿毒、病院壞疽、惡性馬病等ノ諸毒、及、泰、喪、度、痢、病、傳、染、毒ノ如等是ナリ、人々皆器臟ノ炎ニ罹ル可キ素因ヲ有ス、然レモ、素因ヲ有スルハ、必、多少アリ、虛弱家ノ如キハ、常ニ素因ヲ具フルコト強ク、或ハ持ニ某器ニ此素因ヲ具備セル者アリ、例之ハ、腺病家、暴飲家ハ、肺臟粘膜炎ノ素因ヲ具ヘテ、氣管枝炎

ニ罹リ易キカ如シ、又器械ノ一部ノミ、多ク此素  
 因ヲ有スルヲアリ、例ハ、肺臓炎ハ、總テ下葉ニ發  
 シ、心臟内膜炎ト、心臟筋肉炎トハ、專左房ヲ襲フ  
 右房ニ發スルハ、カ如シ、故ニ炎ノ瓣膜ニ波及ス  
 極メテ稀ナリ、ハ、カ如シ、故ニ炎ノ瓣膜ニ波及ス  
 ルハ、常ニ僧帽瓣ニ於テシ、聽診ヲ以テ、僧帽瓣、大  
 動脈瓣ノ異音ヲ聽クヲ多シ、

症候組織ノ發炎シテ種々變化スル状態ハ、各種  
 ノ炎ニ由リテ死セル人身ニ就テ學ヒ得ル所ニ  
 シテ、活體ニ於テモ亦外表ニ炎ヲ起セハ、直ニ目  
 撃シ得ルヲ以テ、之ヲ學フ可シ、例之ハ、皮膚、眼球、

及目撃ス可キ粘膜等ノ炎ノ如シ、或ハ刺衝物ヲ  
 以テ動物體ノ局部ニ炎ヲ誘起シ、顯微鏡ヲ用ヒ  
 テ學フ可シ、乃強烈火酒、茺菁丁、幾、硝酸銀、安母尼  
 亞、鑛屬酸等ヲ動物體ノ局部ニ注キ、或ハ細針ニ  
 糸ヲ繫キテ、局部ヲ穿通スルカ如シ、此試驗ヲ行  
 ハンニハ、須透明ニシテ、視易キ部ヲ擇フ可シ、乃  
 蛙足ノ蹼、蛙ノ腸間膜、及舌、或ハ蝙蝠翼等ノ如シ、  
 又動物ノ角膜ヲ預刺衝シテ、發炎後之ヲ截取シ、  
 檢スルモ亦佳ナリ、而シテ檢査ノ間ハ、斷ニス檢  
 査面ニリスリン、或ハ水樣液ヲ注キ、滋潤シテ蒸

散ヲ防クヲ要ス、試ニ蛙ノ腸間膜ニ炎ヲ誘起シ、  
顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢セハ、細動脈擴張シテ搏動  
ヲ起シ、凡ニ時ヲ經レハ、其大殆常ニ倍ス、次テ靜  
脈モ亦擴張スレトモ、動脈ノ如クナラス、初起ハ  
血液ノ循環亢盛スレトモ、逐次ニ怠慢ス、此時ニ  
方リテ、髮細管モ亦膨大シ、其景況變常ス、夫髮細  
管ノ血行ハ、生理學的ノ景況ニ於テハ、赤血球管  
ノ中軸ヲ循環シ、血漿其周圍ニ在リテ、直ニ管壁  
ニ近接シテ、流通スレトモ、發炎スル片ハ、周圍ノ  
血漿消失シテ、白血球之ニ代リ、管壁ニ沿ヒ、鬱積

シテ、一層ヲナス、故ニ赤血球管ノ中軸ニ在リテ、  
白血球ノ層中ヲ緩流ス、然シテ、少時ヲ經レハ、白  
血球ノ管壁ヲ穿チテ、外泄スルヲ見ル、其外泄ノ  
始、管壁ノ外面ニ無色ノ小蕾ヲ生シ、漸次ニ增大  
シテ、遂ニ管壁ヲ離レ、近傍組織中ニ入リテ消失  
シ、更ニ新蕾ヲ生シテ、外洩スルヲ前ニ異ナラス、  
是帝ニ髮細管ノミナラス、靜脈首端ニ於テモ亦  
然リ、此狀態ヲ明カニ視ント欲セハ、預有色粉末  
例ハ、洋紅、銀朱、アニ、  
ビ、洋藍、如シ、  
ヲ動物ノ靜脈ニ注入ス可シ、  
假令少量ナルモ、白血球能ク之ヲ吸收シテ、著色

シ、管壁ヲ穿ツヲ以テ、瞭然視別ス可シ、赤血球モ亦白血球ニ隨ヒテ、脉外ニ漏出スルヲアレトモ、甚些少ナリ、如此シテ、二三時ヲ過クレハ、管圍、悉血球ヲ以テ圍擁セラレ、且、血中澄液ノ一分モ亦滲透ス、前件ノ事實ヲ能ク詳説スルヲ、極メテ難シ、彼ノ文血ヲ起スハ、動脈ノ膨大ニ由ル、此膨大ハ、交感神經ノ刺戟ニ繼發スル所ニシテ、其初、交感神經、刺戟セラレ、一回、脉壁ノ筋層ヲ收縮スルモ、次テ必、弛緩スルヲ以テナリ、如此キ刺衝ヲ受クルハ、刺衝物ノ直接ニ由ルヲアリ、或ハ知覺神

經ノ反射ニ由リ、交感神經ヲ刺戟スルニ由ルアリ、如此ク、脉管擴張スレハ、脉壁菲薄トナリ、血液、多少ノ澄液ヲ失シテ、稠厚トナリ、血行隨ヒテ、怠慢ス、又白血球ノ、脉壁ニ近接シテ、鬱積スル者ハ、血行ノ怠慢ト、澄液ノ失却トニ由ルナラン、白血球ハ、其運動スル間ハ、圓形ヲ保ツモ、既ニ静止スレハ、變形シ、點々延長シテ、星状ヲナシ、其尖端ヲ以テ、少ク管壁ヲ穿テ、一部管外ニ露出スレハ、管内ノ部、收縮ヲ始メ、一縮毎ニ多少、壓出シテ、遂ニ全ク脱出ス、是、白血球ノ、脉壁固有ノ細孔ヲ

通過スルカ、或ハ更ニ脉壁ノセル間ニ、細孔ヲ穿ツカ、未之ヲ確定スルヲ能ハス、又此少ノ赤血球ノ漏出スルハ、白血球ノ穿テル孔竅ヲ過クルノ他ナシ、然レモ、孔竅ノ閉鎖、迅速ナルヲ以テ、多量ニ漏ル、ノ患ナシ、白血球、如此ク外出スレハ、速ニ脉管ノ近傍ヲ辭シテ、組織ノセル間ニ入り、種々變形シテ、自己ノ通過ニ適應ナラシム、然シテ、數時ヲ經レハ、白血球、腸間膜ヲ充填シ、一半ハ、膜組織中ニ留マリ、一半ハ、遊離シテ、膜面ニ露出ス、試ニ蛙、或ハ他ノ動物ノ腹膜腔内ニ、一片ノ撒糸

ヲ挿入シ、或ハ少量ノ芫菁丁幾ヲ注入シテ、二十四時ヲ過クレハ、腹膜炎ヲ發シテ、膜面悉、滲泄物ノ厚層ヲ被覆ス、此層ハ、白血球ト、血漿トノ混合シテ成レル者ニシテ、即チ膿汁ナリ、故ニ各種ノ炎症ニ生スル尋常ノ膿球ハ、血管ヨリ漏泄セル白血球ニ他ナラス、然レモ、總テ膿球ハ、血液ヨリ化生スルカ、將、他法ヲ以テ、釀成スルカ、未、疑團ヲ免レヌ、舊說ニ隨ヘハ、發炎セル組織中ニ於テ、其セル核分裂シテ、膿球ヲナス、例ハ、結締織中ノ膿球ハ、結締織セル分裂シテ、釀生スルカ如シト、然レモ、

膿球ノ發生ハ發炎組織ノセルノ分裂ニ由ルニ  
 非ス白血球ノ血管ヨリ漏出シテ自ラ分裂シ漸  
 次ニ増加シテ醸生スル者ナラン若生獸ノ眼球  
 角膜ヲ刺衝シテ炎ヲ起サシメ之ヲ截取シテ顯  
 微鏡ヲ以テ檢セハ無色球ノ漸次ニ刺衝部ニ向  
 ヒテ進行スルヲ見シ此球ハ角膜セルノ分裂シ  
 テ生セル者ニ非ス通常角膜ヲ流通セル白血球  
 ヨリ化生スル者ニシテ初少量ナレハ逐次ニ増  
 量スルヲ以テ看レハ其分裂スルヲ疑ヲ容レス  
 又肝炎ニテ白血球脈外ニ漏出シ膿球ヲ醸生ス

ルノ狀瞭然見ル可シ乃動物ノ肝ヲ刺衝シ炎ヲ  
 誘起シテ之ヲ注視スルニ初ヨリ肝セル内ニ膿  
 球ヲ生スルニ非ス唯其周邊ノ脈管ノ外圍ニ白  
 血球ヲ漏出シテ結締織ヲ充填シ次テ肝セル中  
 ニ入り終ニ膿球ニ化ス角膜或ハ軟骨組織ノ如  
 キ脈管ヲ有タサル部ノ發炎シテ化膿スルハ  
 近傍ノ水脈ヨリ淋巴球ヲ漏泄シテ膿球ヲ醸生  
 スルニ由ル例ハ角膜異物ノ刺戟ヲ蒙ルハ先  
 膜圍ノ脈管充血シ次テ角膜光澤ヲ失ヒ白色ニ  
 變スルカ如シ此ヲ以テ看レハ白血球淋巴球膿



球各自其稱ヲ異ニスト雖皆一物ニシテ唯組織學的ニ其名ヲ區別スルノミ、  
 以上ノ説ヲ以テ看レハ、炎ニ於ル重要ノ事件ハ、  
 第一充血ノ發起、第二血中澄液ノ滲出、第三白血球及些少ノ赤血球ノ漏出、第四脉外ノ白血球分裂增加シテ膿ヲ釀生スル等、是ナリ、  
 〔充血〕ハ慢性炎ニテハ、殆見ルコトナク、常ニ急性炎ニ於テ之ヲ見ル、特ニ皮膚粘膜ノ急性炎ニ最盛ニシテ、多少暗赤色ノ圓點ヲ呈シ、漸次ニ蔓延ス、  
 内臓炎ニ於テモ亦死後ニ之ヲ見ルコトアリ、例ハ、

腦腎肺肝ノ炎ニ於ルカ如シ、然レモ充血ハ死後多分消散減少スルヲ以テ、皮膚粘膜ニ於ルカ如ク、著明ナラス、而シテ熱度ノ昇騰ト、兔ノ交感神經ノ感耳垂、充血シテ、温度大ニ昇騰スルカ如シ、澄液滲漏トヲ助發ス、然レモ、某部ノ充血ハ、其部ノ炎ト、判別セザル可カラズ、  
 甲ニ於テハ、組織變化、及白血球ノ外泄ヲ見マスト雖、乙ニ於テハ、必之ヲ發ス、  
 〔滲世物〕ハ、其性一ナラス、或ハ澄液、或ハ粘液、或ハ纖維素、或ハ膿汁ナルコトアリ、或ハ此諸液、多少混淆スルコトアリ、例ハ、膿汁、粘液、相雜ハルカ如シ、

第一、澄液純粹ナルハ、其性水腫ノ液ニ異ナラス、遊離面ニ之ヲ見ルコトアリ、例ハ、粘膜加答兒ニ於ルカ如シ、或ハ澄膜腔内ニ之ヲ生ス、例ハ、澄膜ノ炎性水腫ニ於ルカ如シ、或ハ組織中ニ在ルコトアリ、

第二、粘液ハ、粘膜炎ニ於テ、其滲泄スルヲ見ル、例之ハ、腸肺、或ハ眼球炎ニ於ルカ如ク、粘膜ノ腺ヨリ泌別シ、尿管ヨリ滲泄セル澄液ト混和ス、

第三、純纖維素ハ、專澄膜面ニ於テ滲出シ、液態ニテ、髮細管ヨリシ、膜面ニ出テ凝結シ、其纖維間ニ滲

出セル澄液ト、白血球トヲ含ミ、多少ノ厚膜ヲ形成シテ、膜上更ニ一層ノ偽膜ヲ掩フ、若、其膿球ヲ含ムコト多ケレハ、之ヲ纖維膿性滲出物ト云ヒ、若多量ノ澄液ヲ雜フレハ、之ヲ纖維澄液性滲出物ト云フ、

第四、膿汁ハ、膿球ノ醸生ヲ以テ徵知ス可シ、其新鮮ナルハ、無臭、稀黃色ノ亞爾加里性液ニシテ、澄液ト、白血球トヨリナル、澄液ハ、清澄白黃色ニシテ、亞爾加里性ヲ具ヘ、水分、蛋白質、及血中鹽類ヲ含有ス、膿球ハ、其形白血球ノ如ク、圓形ノセルニ

シテ直徑二百分一ミリ。メートルヲ有シ、至薄ノ  
 被膜ヲ具ヘ、内ニ顆粒狀物、及細核ヲ孕有セリ、之  
 ニ少量ノ醋酸ヲ注ケハ、其核見ル可ク、水、尿、或ハ  
 稀酸ヲ加フレハ、膨脹シテ、遂ニ破裂ス、又腸近傍  
 ノ膿瘍、或ハ骨瘍ヨリ漏セル膿汁ハ、極メテ惡臭  
 ヲ帶ヒ、恰、硫化水素ニ類ス、假令膿瘍、腸ニ通セザ  
 ルモ、腸内ノ氣ヲ吸收シテ、然ルコトアリ、故ニ鼠蹊  
 部ノ膿瘍ニ於テモ、亦然リトス、又遊離セル核ヲ  
 含ム、是、膿球ノ頽廢シテ、遊離セル者ニ他ナラス、  
 其他赤血球、内皮セルヲ雜ヘ、或ハ組織ノ老廢分

ヲ含ム、例之、骨質、結締織等ノ碎片ヲ雜ヘ、或ハ  
 ヲ含ム、肺ノ膿瘍ヨリ、漏出セル膿中ニ、彈力纖維  
 ヲ如シ、或ハ三鹽基磷酸鹽ノ結晶ヲ有シ、又或ハ  
 振蕩蟲是謂滴蟲ヲ混シテ、膿汁ノ綠色、或ハ藍色  
 ナルコトアリ、又膿ノ紅色ヲ帶フル者ハ、赤血球ノ  
 存セルニ由ル、膿ハ、皮膚、或ハ粘膜面ヨリ、自在ニ  
 漏泄ス可シ、例ハ、皮膚ノ創傷、火傷等ニ於テ見ル  
 カ如シ、粘膜ヨリ、漏出スル者ヲ二種ニ區別ス、一  
 ハ、稀薄水樣ナリ、之ヲ稀膿ト稱シ、一ハ、純粋ニシ  
 テ、稠厚ナリ、之ヲ醇膿ト稱ス、淋疾ノ初起ニ漏出  
 スルハ、醇膿ニシテ、稠厚ナルモ、次テ稀薄ノ液ヲ

原病學通論 卷之五 三十一

原病學通論 卷之五 三十一 三十一

洩出ス、即稀膿ナリ、眼球炎ニ於テモ亦然リ、又腔  
洞ノ澄膜面ヨリ膿汁ヲ漏洩スルヲアリ、之ヲ包  
裏膿ト云フ、胸部包裏膿ト云フキハ、即胸部内、膿汁ヲ含ム者ナリ、又組織中  
ニ膿ヲ醸生スルヲアリ、之ヲ組織醸膿ト云フ、結  
テ膜面ヨリ膿ヲ漏出スルニ方リテ、唯充血シテ  
止ムコトアリ、或ハ外表ノ組織ノミヲ失フコトアリ、  
之ヲエロージョンノ耗壞スルト云フ例ハ、粘膜炎、皮膚  
ニ於テ、其表皮ヲ頽廢スルカ如シ、或ハ深在組織  
ヲ頽敗スルコトアリ、之ヲ潰瘍ト云フ、若ク管狀  
ヲナス者ハ、之ヲ瘻管ト云フ、通例深部ヨリ外表

ニ達シ、皮膚或ハ粘膜炎ヲ穿開スル者多シ、又表部  
ニ起リテ、深部ニ波及スル者アリ、又膿ヲ組織中  
ニ醸生スレハ、組織ヲ分裂シテ、四圍擁塞セル腔  
洞ヲ形成ス、之ヲ膿瘍ト稱ス、或ハ膿ノ壓力、組織  
ヲ分裂スルコト能ハサル部位ニ於テハ、其膿組織  
内ニ滿溢ス、之ヲ膿汁滿溢ト云フ、膿瘍及慢性潰  
瘍ハ、經久後、其周圍ニ炎症硬結ヲ生シ、組織ニ充  
血ヲ發シ、澄液ヲ滲泄シテ、之ヲ充填シ、由リテ局  
部ノ營養機旺盛シテ、更ニ結締組織ヲ新生シ、囊ヲ  
形成シテ、遂ニ健部ト分界ス、

原病學通論 卷之五 三十一 三十一

潰瘍ハ之ヲ數種ニ區別ス天ハ潰瘍ノ邊緣充血ヲ起シ、焮赤腫脹ス之ヲ炎性潰瘍ト稱ス、漸次ニ蔓延スルヲ以テ、診定スルヲ、須要ナリ、地ハ、速ニ蔓延シテ、近傍組織ヲ荒蕪ス、之ヲ侵蝕性潰瘍ト稱ス、例ハ、軟性下疳ノ如シ、人ハ、邊緣、底面共ニ壞疽ニ陥リ、黒色ニ變ス、之ヲ壞疽性潰瘍ト稱ス、是、血管閉塞シテ、血液瀦溜スルニ由ル、又潰瘍ニ、局部ニ發シ、二種アリ、甲ハ、局部ノ傷害ニ由ル、例之ハ、創傷ノ如シ、乙ハ、汎發病ノ為ニ發ス、例ハ、全身梅毒、ス、コル、淋、痢疾、及、泰、斐、度、熱、ノ、為、ニ、腸、ニ、生、セ

ル潰瘍或ハ結核ニ於テ生セル肺ノ潰瘍、腺病性即、水脉腺潰瘍、癌腫性潰瘍等ノ如シ、又胞狀潰瘍ト稱スル者アリ、是、皮膚ノ胞狀腺、釀膿シテ、潰瘍トナル者ナリ、下疳ニ於テ然ルヲ多シ、初メ皮膚ノ胞狀腺、膿汁ヲ吸收シテ腫脹シ、破裂シテ膿汁ヲ漏洩シ、遂ニ變シテ、潰瘍トナル、泰、斐、度、熱、ニ於ル腸ノ潰瘍モ亦トス、此、腺、腫、起、シ、テ、破、潰、シ、潰瘍ニ變スル者ナリ、潰瘍ハ、大抵其形橢圓或ハ正圓ナリ、稀ニ有角ノ者アリ、例ハ、手指、足趾間ノ潰瘍、肛圍發間ノ潰瘍ニ於ルカ如シ、口角ニ發ス

ル者モ亦然リ、總テ有角部ニ發スル者ハ皆然リ  
 トス、又其邊縁ハ種々ノ形狀ヲナス、甚薄キ者ア  
 リ、或ハ厚クシテ隆起セル者アリ、之ヲ隆縁潰瘍  
 ト云フ、此隆起、消散セサレハ、治癒スルヲ能ハス、  
 又邊縁ノ硬軟、一ナラス、例ハ、硬性、軟性ノ疔瘡ニ  
 於ルカ如シ、内皮癌腫ノ邊縁モ亦硬固ナリ、又縁  
 壁、底面ニ對シテ、直立スル者アリ、如此キ者ハ治癒スルヲ難シ  
 或ハ内外ニ彎曲シテ、底面ニ連接スル者アリ、例  
 ハ、癌腫性ノ者ニ於テ見ルカ如シ、又底面ノ形狀、  
 平坦ナル者アリ、凸出セル者アリ、凹陷セル者アリ

リ、然レモ、初起ハ、皆凹形ニシテ、肉芽ノ發生スル  
 ニ由リ、平坦トナリ、漸々隆起シテ、遂ニ凸出ス、或  
 ハ口徑ニ比セハ、底面ノ廣大ナルヲアリ、若一方  
 ニ向ヒテ、深ク蔓延スレハ、變シテ瘻管性潰瘍ト  
 ナル、之ヲ全ト、不全トニ分ツ、不全ハ、唯一口ヲ有  
 ス、其皮膚ニ開口スルヲ外部不全瘻管性潰瘍ト  
 云ヒ、粘膜ニ穿孔スルヲ内部不全瘻管性潰瘍ト  
 云フ、例之ハ、耳下腺排泄管ノ創傷ニ由リテ、口部  
 ニ開口スルハ、甲種ニシテ、膿瘍ノ肛内粘膜ニ穿  
 孔スルハ、乙種ナルカ如シ、全瘻管性潰瘍ハ、二口

アリ、一ハ、粘膜ニ開キ、一ハ、皮膚ニ發スルヲ常ト  
 ス、然レモ、或ハ二口共ニ粘膜ニ在ルアリ、此兩  
 口間ノ瘻管、甚短クシテ、殆相接スルアリ、之ヲ  
 唇狀瘻管ト稱ス、例ハ、淚囊潰瘍ニ於テ見ルカ如  
 シ、是、皮膚粘膜ト直接スル、恰唇ノ如シ、故ニ此  
 名ヲ得タリ、又之ニ反シテ、瘻管ノ極メテ長キ  
 アリ、例ハ、痔瘻、尿瘻ニ於ルカ如シ、或ハ直線、或ハ  
 屈曲シ、或ハ種々迂曲セル者アリ、潰瘍ノ底面、赤  
 色ニシテ、黃色膿ヲ漏泄シ、過鏡ナラサル片、及肉  
 芽面、邊縁ヲ出テス、殆邊縁ト、水準ナル片ハ、之ヲ

健康潰瘍或ハ善性潰瘍ト云フ

膿ノ變化ハ、第一膿汁醸生シテ、組織ヲ穿テ、粘膜  
 面、皮膚面、或ハ腔洞内ニ洩出シ、或ハ内臟ニ膿瘍  
 ヲ生シテ、肌表ニ開孔ス、例ハ、肝臟膿瘍ノ終リニ、  
 外表ニ穿孔スルハ、初メ膿瘍ノ為ニ、自己ノ腹膜  
 ニ炎ヲ起シテ、腹膜ノ腹壁層ト癒著シ、漸次腹  
 壁ヲ穿通スルニ由ルカ如シ、腸ノ膿瘍モ亦外面  
 ニ開口スルアリ、肝ノ膿瘍ニ於テ、若其腹膜腹  
 壁ノ腹膜ト癒合セサレハ、腹腔内ニ開孔シ、或ハ  
 腸胃ノ内ニ穿通スルアリ、是、炎ノ為ニ、腸胃ト

癒合スルニ由ル或ハ横隔膜ニ癒着シ之ヲ穿テ  
 テ胸腔内ニ開孔スルアリ、總テ膿ハ抗抵少ナ  
 キ部ヲ擇ヒテ進路ヲ求ム故ニ膿瘍ノ其開口部  
 ニ甚近通スルアリ例之ハ皮下膿瘍ニ於ルカ  
 如シ或ハ開孔部隔離シテ長路ヲナスアリ例  
 ハ脊椎體ノ膿瘍鼠蹊或ハ股部ニ開口スルカ如  
 シ如此キ症ハ其膿汁常ニ結締織ノ間隙ヲ通過  
 ス是此部ハ抗抵最輕ケレハナリ、此症ハ經週  
 六年間、軀幹ノ前方ニ彎曲スルヲ見ル、昔シキ  
 症候ヲ發セズ、**第二**膿汁吸收  
 セラル然レ唯少量ナル片ニ在リ、巨大ノ膿瘍

ニ於テハ悉吸收セラル、ナシ先澄液分吸收  
 セラレ膿球ハ脂肪變性スルノ後ニ至リテ吸收  
 セラル**第三**膿汁乾酪變性ハ緊要ナル變化ニシ  
 テ先其澄液分吸收セラレ膿球皺縮シテ一半ハ  
 脂肪ニ變性シ一半ハ乾燥シテ濃厚黄色ノ物質  
 ニ化シ其形狀恰乾酪ニ似タリ此物質組織中ニ  
 滞在スレハ恰異物ノ如ク組織ヲ刺衝シテ炎ヲ  
 起ス腺病家ノ水脉腺腫及骨質炎ノ後ニ於テ此  
 變化ヲ發ス持ニ多キハ骨質ノ海綿樣部トス故  
 ニ脊椎骨體ノ發炎後ニ多ク此變化アリ例之ハ



小兒ノ佝僂病ニ於ルカ如シ、又肺ニ於テ多ク之ヲ見ル、乃氣管枝粘膜炎ヲ發シ、粘液、膿汁、血液ヲ滲漏シ、相混淆シテ、久シク蓄溜ス、故ニ澄液分吸收セラレ、膿球變性シテ、乾燥セル黃色物トナリ、氣管枝末梢、及氣胞ヲ充填シ、遂ニ勞瘵ニ陥ル、中古ハ之ヲ肺ニ生セル特異發生物、即結核ナリト謂ヘリ、然レモ、其實ハ、膿汁ノ水分、吸收セラレテ固形分ノ變性セルヨリ生スル者ニ他ナラス、故ニ勞瘵ト結核トハ、全然異性ノ物質ニシテ相關涉セス、而シテ甲ハ多ク、乙ハ稀ナリ、彼ノ胸病人、

患者ニ於テ、通常先肺ノ上部ヲ打診スル所以ノ理モ亦此說ニ由リテ判然タル可シ、夫肺ノ上葉ハ、運動寡ナキヲ以テ、炎ノ産物、蓄溜シテ變性シ易ク、之ヲ咯出シテ、排泄シ難シト雖、下葉ハ、運動盛大ナルヲ以テ、深吸氣ノ後、咳嗽ヲ以テ、容易ニ之ヲ咯出ス可シ、故ニ勞瘵患者ノ鎖骨下ヲ打ソ片ハ、必濁音ヲ發ス、**第四**膿汁ノ變質シテ石灰質ノ硬塊ニ化スルハ、特ニ水脉腺ニ多シ、一回梅毒或ハ腺病ニ罹レル者ノ水脉腺硬變シテ、經久マル者ハ、彼ノ石灰變質物ヲ含有セルニ由ルナリ、

第五膿汁ノ腐敗變化ハ其稠厚ト黄色トヲ失ヒ稀薄水樣ニ化シテ膿球殆消亡シ唯球核ヲ遺スノミ多クハ血液ヲ雜ヘ惡臭ヲ帶フ創傷後ノ膿汁腐敗スレハ傷面惡性ノ看ヲ顯シ多クハ壞疽狀ニ變シテ黑色ヲ呈シ速ニ蔓延増劇ス此時ニ於テ若吸收セラレハ膿毒或ハ患膿毒ヲ起スヲ以テ甚危篤ナリトス

右ニ論セル滲出物ノ他尚一種ノ特異ナル者アリ

甲、義膜性滲出物ハ專粘膜或ハ粘膜面ニ開口セ

ル腺ニ於テス例之ハ氣喉或ハ食喉ノ粘膜ニ於ルカ如シ特ニ屢氣喉一發又肺腎或ハ暴露セル皮膚ノ創傷面ニ生ス而シテ粘膜上ニ灰白色ノ假膜ヲ生シテ強ク膜面ニ凝着ス是凝結セル纖維素ト白血球トヨリ構成セル所ニシテ強テ之ヲ剝離スレハ膜面赤色充血狀ヲナシ細小ナル顆粒狀物ノ罹列スルヲ見ル爾後忽滲出物ノ新假膜ヲ形成ス通常五六日ヲ經レハ此滲出物變性シテ膿ヲ混セル粘液トナリ假膜自ラ剝離シテ唯尋常ノ粘膜炎ヲ貽スノニ此性ノ滲出ハ特

異ノ毒物ニ由ルト雖其毒性ノ何タルヲ知ル  
能ハス、多クハ流行性ニシテ、小兒ヲ侵シ、其氣喉  
ヲ閉塞シテ、窒息セシム、又肺炎ヲ併發シテ極メ  
テ危險ナルヲアリ、

乙實布の利性滲泄物モ亦專粘膜ヲ襲ヒ、持ニ食  
喉ニ多ク、氣喉ニ稀ナリ、又創傷ニ於テ見ルヲア  
リ、而シテ特異ノ毒物ニ基因シ、前者ノ如ク、膜上  
ニ假膜ヲ生スト雖、其異ナル所以ハ、組織實質中  
ニ滲透シテ凝結シ、膜質中ノ脉管ヲ壓搾シテ、遂  
ニ之ヲ閉塞ス、故ニ粘膜頽廢シテ、黑色ニ變シ、剥

離シテ、食喉ニ懸垂シ、竅透スルカ如ク、惡臭ヲ放  
ツ、多クハ散在性ナルモ、時アリテ、流行性トナリ、  
許多ノ人民ヲ害ス、又小兒ノミニ非ス、大人ヲ侵  
スヲアリ、常ニ劇熱、水脉腺腫、及、大衰憊等ヲ起シ、  
治後必、其部ノ筋ニ麻痺ヲ貽ス、或ハ唯一筋ニ限  
レルヲアリ、例ハ、眼球節度筋ニ於ルカ如シ、或ハ  
數筋ニ在ルヲアリ、甚、奇ト謂フ可シ、然レモ、其理  
ノ如キハ、未ダ了解スルヲ能ハス、  
以上論述セル各種ノ滲泄ハ、漸次ニ轉移ス、故ニ  
各個ノ經界、判然區別ス可カラス、例ハ、感冒ノ為

二、鼻腔粘膜發炎シ、先、清澄ナル澄液ヲ滲泄シ、若  
 源由劇シクシテ、持續スルハ、澄液中、白血球ヲ  
 雜ヘテ、逐次ニ不透明ニ變スルカ如シ、又粘膜ハ、  
 尿道粘膜ニ如シ、若、強烈ナル刺戟ヲ受クルハ、初起  
 二醇膿ヲ漏泄シ、次テ粘液ヲ雜ヘテ、漸次ニ清澄  
 トナリ、終ニ純粹ノ粘液ニ變シテ治ス、故ニ痲疾  
 二於テハ、膿汁ヨリ、粘液膿ニ轉移シ、遂ニ粘液ニ  
 變ス、又義膜性毒、粘膜ヲ侵セハ、織素ヲ滲泄シ、凝  
 結シテ、膜上ニ假膜ヲ造リ、或ハ膜質組織中ニ滲  
 透シ、凝結スレハ、膜質中ノ脉管ヲ壓迫シテ閉塞

シ、多少膜質頽廢ス、是所謂實布の利質斯ナリ、此  
 兩種ノ滲出モ亦初起ハ、白血球ヲ混セル織素ナ  
 ントモ、次テ膿汁ニ變シ、又轉シテ粘液膿トナリ、  
 終ニ粘液トナル、他種ニ異ナラス、

原病學通論卷之五畢



